

## 第2章

障害者スポーツ選手発掘・育成システムの現状  
と今後の方向性に関するヒアリング調査

## 調査概要

障害者スポーツ選手発掘・育成システムの現状を把握し、実現可能な今後の報告性を提案するための基礎資料として、大規模な質問紙調査と中核に位置する関係者へのヒアリング調査を併用した。質問紙調査では質問項目を選定する段階で関係者へのヒアリング調査は必須となるので、①関係者へのヒアリング調査に基づく調査票の作成、②質問紙調査の配布・回収・分析・集計、③調査結果を手元資料とした関係者へのヒアリング調査の手順を踏んだ。①と③の関係者が同一人物であったり異なる人物であったりするが、さまざまな角度からのアプローチは課題をひも解くために有効となる。とりわけ、③の段階では質問紙調査で捕捉できない特殊事情や見落とす視点を収集できる重要な作業となる。

本年度のヒアリング調査では、①障害者スポーツ競技団体、②障害者スポーツコーチ・スタッフ、③障害者スポーツトップアスリートそれぞれに複数の方々の協力を得た。障害者スポーツ競技団体では三井利仁（一般社団法人・日本パラ陸上連盟・理事長）、井上明浩（非営利活動法人・日本知的障害者陸上連盟・副理事長）、野村一路（非営利活動法人・日本障害者スキー連盟・専務理事）3名、障害者スポーツコーチ・スタッフでは峰村史世（MINEMURA ParaSwim Squad）、丸山弘道（株式会社オフィス丸山弘道）、臼井二美男（鉄道弘済会義肢装具サポートセンター）、桜井智野風（桐蔭横浜大学）4名、障害者スポーツトップアスリートでは、鈴木徹（プーマジャパン株式会社）、高田朋枝（日本スポーツ振興センター）、成田真由美（横浜サクラスイミング）、国枝慎吾（株式会社ユニクロ）、狩野亮（株式会社マルハン）5名の各氏12名にのぼる。

ヒアリング調査に臨んでは、障害者スポーツ競技団体、障害者スポーツコーチ・スタッフ、障害者スポーツトップアスリートそれぞれに共通質問をあらかじめ準備し、その後、インタビュアーが適宜、スポーツ・キャリアやスポーツ環境の変遷、現在の社会経済的基盤やトレーニング事情、障害者スポーツ選手の発掘・育成に関する課題や展望など、多面的な角度よりヒアリング調査を展開した。12件の報告では、共通質問を冒頭に掲載した後に、膨大なヒアリングより編集作業にあたったインタビュアーが重要と判断した課題や視点を抽出している。回答者の肉声を可能な限り反映する意図で話し言葉をそのまま掲載したり、インタビュアーが課題や問題点を解説したり、要約したり、多岐にわたる。

## I 障害者スポーツ競技団体 1 三井利仁

### ■ヒアリング概要

日時	2014(平成26)年9月8日	場所	和歌山県立医科大学
所属	一般社団法人・日本パラ陸上連盟・理事長		
回答者	三井利仁		
聞き手①	藤田紀昭 (同志社大学スポーツ健康科学部)		
聞き手②			
聞き手③			
編集	藤田紀昭 (同志社大学スポーツ健康科学部)		

### ■共通質問事項要約

①障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か	<p>●競技団体のHPが対会員、対組織の掲示板にしかなくない。 ⇒外発信用にHPを作り替えており、地域との情報のやり取りや認知の機会を増やしていきたい。問い合わせも増えてきている。</p>
②障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か	
③2020オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか	<p>●JPC、国に対する期待 ⇒団体が生き残れるかが不安。どの国でも強化の面倒は各競技団体が見ている。IPCのキーワードは「インテグレート」。JPCもそれを念頭に対応を考えてほしい。国に対しては、障害者スポーツセンターを拠点にするため指定管理者制度を外してほしい。</p>

### ■競技団体質問事項要約

④組織基盤強化の難しい面は	<p>●2020年のオリ・パラ開催が決まり、強化費が上積みされたが、それだけの活動資金を回せる人材がない。 ⇒スポンサーを増やすことで自主財源で事務局員を増強するとともに、企業経験者などお金の流れをみられる人材を確保したい。</p>
⑤人材発掘についての課題と展望を教えてください	<p>●日本陸連と体制・人材・情報を共有しながら、オリ・パラを1つのカテゴリーとして発掘・育成に取り組むやり方が有効だと思うが、団体が複数存在するため協力しづらい状況。 ⇒各団体の事務局長レベルで運営のあり方を模索中。パラ陸連では全国8ブロックの理事が各地でリサーチ、強化員と連携してスカウトに結びつける取り組みを2年前から実施。</p>
⑥人材育成についての課題と展望を教えてください	<p>●現在のコーチ、スタッフはほぼ全てボランティアという状況で、2020年に向けた練習を見るのは無理。 ⇒日本のエリートスポーツ体系は大学がトップなので、大学関係者がパラ陸連に入ってくる形を進めていきたい。 ●現状では育成プログラムがない。 今年度中にデザインし来年から実施したい。まずはブロック単位でグランプリ形式の競技会。審判の目に触れる機会を作ることで、学校への情報共有等につなげたい。</p>
⑦その他	<p>●コーチ陣で障害者スポーツコーチ資格者が少ない。 ⇒初級からでも取ってもらうように働きかけている。有資格者の集まりにしたい。 ●審判、クラシファイヤーの人数が足りない。 ⇒一番大切なのは競技運営。国際ルールに精通した人間を5年間で100名まで増やしたい。</p>

—最初に一般社団法人を取得した理由、取得して何が変わるか、というところを教えてください。

■パラリンピック強化や文科への移行といったことがあるので、昨年度中に法人化をしてくれという行政指導があり、動き出しました。それが一番の大きな理由です。また本連盟の会長も今後のことを考えて「絶対法人格を取ってくれ」という意向がありました。取ったことによってまず変わったのは理事等役員の意識です。法人に対しての責任というのが。会議をしても来る役員の数が増えました。それだけ社会的な責任が重くなる、その辺の意識レベルが非常に高くなったんじゃないかな。■そして、自分自身、法人格を取った時に理事長としては年間 2,000 万ぐらいのスポンサーフィーは欲しい。それはやはり法人として事務局員を自主財源で雇用していく。補助金に頼らない。法人化してないとそういう企業からのお金がなかなか出ませんから。法人化を含め、今のパラ陸連としてはそういう組織の屋台骨をしっかりとすることが重要だと考えています。

—日本陸連との関係というのはいまどういう形になっていますか。

■いまは基本的には何もない関係です。一応協力していただいている職員の方とかいますが、いわゆる法人と法人の関係は何もないです。水泳の場合、水連の傘下に入ることになったじゃないですか。僕らもそれを模索していたんですけど、大きなネックとしては陸上競技の場合、車いすの選手と義足の選手の記録が公認されないということがあります。水泳の場合は、日常車いすでも義足でも、プールに入る時は外すじゃないですか。そうすると助力とか何にもならないんですが、我々の場合は車いすと義足に関してはまだ世界的にも認められていないので。ピストリウス選手の場合はスポーツ仲裁の関係があったので特別ケースだった。ただ国際陸連としては義足を認めていない。ピストリウスは認めたけども義足は認めていないというイレギュラーなところなんですよ。■ですから記録というところでずっとこだわりがあると思うんですけども、陸上競技というカテゴリーの中で、片やオリンピックで、片やパラリンピックというところを目指していて、いわゆる強化体制とか人材というハードとソフトを共有していきましょうと。あと情報を共有しようというところでいくと、パラリンピックに特化したところだけ国内競技団体(National Federation : NF)の中に取り込んでもらって、これからどうやってタレントを発掘していくとか、どうやって指導者を育てていくかというのはNFの中で考えていった方が有効的じゃないかなと僕は思うんです。陸上の他の障害種の団体との統合についても言われているんですけど、最終的に1つのものを作り上げていこうといま準備は始めています。パラリンピックにエントリーをすとか、国内での障害者陸上競技の中心的な役割を担っているのが、後発の元日本身体障害者陸上競技連盟ということもあり、難しいところもあります。一足飛びに統合できるというのは難しいでしょう。方策としては2020年対策本部というものを作って、あらゆる陸上競技の頭をそこに持ってきて、それに強化費を落としてもらってパラリンピックに向けた強化をしつつ、2020年により近いところで1つのものにしていくのか、あるいは日本パラ陸上競技連盟、知的障害(ID)の分、ブラインドマラソンの分というようなカテゴリー分けをして、運営していくというのも手なのかなというのは、このところ各団体の事務局レベルで模索しています。各団体とも気持ちは共通しています。

一団体として活動していく時にどういうふう<sup>に</sup>活動費の運用面で課題はありますか。

■やはり 2020 年が決まって今年度から一気に強化費が上積みになって、変な話、組織としては黒字倒産になりつつある感じ。人がいない。回しきれない。たとえば 1,000 万円が 4,000 万円になった、と。じゃあ 4,000 万円で活動してみようと思うと、じゃあそれだけの合宿に本当に来られるのかということ、いきなりその 4 倍とかに膨らんだ予算はやっぱり皆消化不良を起こすんですね。で、やっぱり国からの補助金なのでかなり税務処理も大変で、その処理をボランティアの人たちにすべて負わせるということはできないし、じゃあ彼らを雇用して、給料を出すからといっても 2020 年以降のことがわからない中では難しいのが現状です。

一コーチとかスタッフの支援や育成についてはどのようにお考えですか。

■日本のエリートスポーツというのはプロスポーツがなければほとんど大学のスポーツでトップレベルに上がっていくという形になっているじゃないですか。そういう点からみて、パラ陸上としてもできるだけ大学の中に入れてもらったりとか、大学関係者にこっちへ入ってきてもらったりするような形ができないかなと考えています。強化のスタイルとしてはそういうやり方をしていかないと。最終的には障害を持った方がリタイアした後に指導者になっていくようなシステムを作っていかなきゃいけない反面、僕らはやっぱりできるだけ大学の関係者とかに入れてもらって、強化施策をつくってもらえたらいいなと思っています。■そして、そういう指導者にはぜひ障害者スポーツコーチ資格など障害者スポーツ指導者の資格を取ってもらいたいと考えています。

一選手発掘や普及についてはいかがですか、競技団体としてやっていますか。

■ちょうどもう 2 年目になるんですけども、選手リサーチ、スカウト部門というのをちゃんと組織内に作って、結構地域に理事を置いていますので、そこから情報を得て、強化委員会の中のスカウト担当が地域大会へリサーチに行っているんです。岐阜の全スポ（全国障害者スポーツ大会）ぐらいから行って。そこでリサーチしてきたものをいわゆるナショナルの合宿に招聘して、そこで体験してもらおう。そこから戻って「やる気があれば戻ってきてね」というやり取りをしていって。それでアジアユースなんかもそこで結構選手を出しています。

一般の学校とかでやっている選手とかについては中体連、高体連、学連、あとはマスターズにアプローチしようと。それをきちんといま日本陸連にお願いをしています。12 月に全国会議がありますので、そこでパラリンピックの陸上競技というのはどういう障害が出られるのか、どういう種目があってどのくらいのタイムで出られるのかというのを、メダルが獲りやすいところ等を今分析しているんです。■さらに全国の 8 地域のブロックごとに大会開催をする。そこに選手に出てもらおう中で育成していく。■そうすると各地域の陸上競技協会の審判や指導者、具体的には中学や高校の陸上関係者とか見てくれると思うんです。そこで情報共有できるようになってくる。そうやってその地域でブロック毎に拠点を作っていって。イベント化をして地域に理解を得て、そこに人が集まってくるような形にして、そこから新たに指導者も競技運営の担当者も見つけていこうかと。それを 3 年ぐらいでやると、たぶんパラリンピックの 2 年前には少しは形ができて、ラスト 2 年はがっ

ちりしたナショナルチームを作りたい。■今本会の登録者は 550 人ぐらい。これをパラリンピックの年に 2,000 人にしたいなど。そのためにはパラ陸連関係者以外に向けて情報発信できるようにしなくてははいけません。ホームページもそのように作り変えています。実際海外遠征などについて行くコーチはそうした陸上の専門家であり、障害者スポーツ指導者の資格を持っているような人を選ぶようにしています。

ー審判は陸連の関係ですので、Classifier (クラス分けの専門化) とかの養成についてはいかがですか。

■いま陸上競技も 2020 年に向けて養成を始めています。国際パラリンピック委員会(IPC) 公認のナショナルテクニカルオフィシャルという制度があるんですよ。それを必ず毎年やらせていただいて、パラリンピックの国際ルールに精通したオフィシャルをできれば 5 年間で 100 人ぐらい増やしたい。通常国際試合だと 300 人ぐらい審判がいます。そのキーマンとなるチーフジャッジはやっぱり資格者じゃないといけないので。そうした有資格者を 100 人。Classifier に関しては 26 人います。そのうち、IPC のライセンスを持っているのは 2 人です。それを最低 10 人ぐらいは欲しいと考えています。Classifier を養成できる資格を持っている人が日本にいますからその人を中心に養成を考えています。

ー東京パラでの目標は？メダルの数とか。

■メダルの数は、どこまで行けるかというのは正直本当には見えませんがアテネには戻りたいです。アテネの時はメダル数 34 個獲っているの。目指せ、アテネで。30~40 個は獲りたいな。177 個のメダルのうち、40 個獲れば…。そうすると JPC が書いてある長期プランというのは陸上で相当数獲れるんじゃないかな。その根拠になるものを、どのクラスのどの種目の男女どこなんだというのをいま作っていますので。そこに対して強化費を入れる。そこに強化費を集中させるつもりです。

ー日本パラリンピック委員会 (JPC) に対する要望・意見、国に対する要望・意見、強化拠点施設に対する要望はありますか。

■JPC に関して言えば、やっぱり本当に障害者の競技団体というのは生き残っていけるのかな。強化事業の根幹だと思うんです。パラスポーツの強化というものを考えた時にどの国もやっぱり一般の NF が面倒見ている。IPC のキーワードはインテグレートなので、やっぱりそこをきちんと日本の中でも使い分けなくちゃいけないと思うんです。JPC に対しては<障害を持った人たちのスポーツというのはどういうふうに捉えていくのか>をきちんと考えて指針を打ち出してほしい。国に対しては、障害者スポーツセンターが拠点施設になるべきだと僕はいつも思っているんですが、そのためにも早く指定管理を外してほしい。指定管理者制度では障害者スポーツでプロが育たない。早く全国の障害者スポーツセンターは広島のように指定管理を外して、正規職員の雇用をきちっと認めてほしい。そうすると、そこが、昔みたいに競技団体の事務所にもなるんですよ。その職員が障害者スポーツを大学で勉強してきた学生の雇用先にもなってきた。そういうパイプにもなって全てをそこで回せるんです。スポーツセンターを拠点化して、拠点職員と一緒にやって成長していくという方法が日本の特長だと思うんですよ、■ナショナルトレーニングセン

ターもいいですけど、僕の持論で言えば、東の東京、西の九州・沖縄。中心が関西なので1つ関西に欲しい。西に拠点。大阪・名古屋とか。障害者のスポーツの拠点というのはやっぱりルールが違うところでやるので、ルールに精通した審判とかもいますし。長期滞在型を考えたらスポーツを離れた時の生活面での環境も重要だと思います。■拠点施設にしても、選手発掘や強化にしても、いまの形というのはやっぱり早く打破しなきゃいけないと思うんです。単にアメリカとかヨーロッパみたいにしてくださいと言うのではなく、**This is Japanese** を早く作り上げなくてはいけないと思います。



(編集責任：藤田紀昭)

## I 障害者スポーツ競技団体 2 井上明浩

### ■ヒアリング概要

日時	2014(平成26)年10月23日	場所	同志社大学
所属	非営利活動法人・日本知的障害者陸上連盟・副理事長		
回答者	井上明浩		
聞き手①	藤田紀昭（同志社大学スポーツ健康科学部）		
聞き手②	山本純生（公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団）		
聞き手③			
編集	藤田紀昭（同志社大学スポーツ健康科学部）		

### ■共通質問事項要約

①障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か	<p>●これまで複数の団体が個別に活動する形で続いてきたが、東京オリパラを見据えると、NTCやJOC、日本陸連と密接に繋がらないと真の意味での強化や社会的認知は得られない。そういう意味でゆくゆくは団体の統合が不可欠と考える。</p> <p>●普及という部分でも、例えばパラ陸上と一緒に地方の大会を開けば、東京より低い標準記録で参加のチャンスが広がったり、旅費を抑えられたりといったメリットが見込めると思う。</p>
②障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か	
③2020オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか	

### ■競技団体質問事項要約

④組織基盤強化の難しい面は	<p>●東京オリパラに向けて障害者の陸上連盟として固まり、中・高体連、学連、マスターズの各団体と同様に横並びで傘下に加盟する形で基盤整備をしたいと思っている。スポンサーの支援を得る上でも、まとまる必要がある。その点で各団体の視線は合っているとは思いますが、今は本当に少しずつハードルをクリアしていている状況。</p>
⑤人材発掘についての課題と展望を教えてください	<p>●現状では発掘の機会となる大会自体が少ないが、クラブなどの有望な選手には声を掛けて全日本への勧誘を行っている。また、5年ほど前からジュニア発掘のための大会も開いている。さらに、全スポではクラブに属さない原石のような選手もいるので、貴重な発掘の機会となっている。</p> <p>●長期的視点に立つと本当は低年齢層を重点的に育てたいと思うが、今はやはり6年後に照準を合わせているので、高校生くらいの選手を重点的に集めている。</p>
⑥人材育成についての課題と展望を教えてください	<p>●80～90年代にかけて知的障害者の競技会が形を変える中で主導する側にも変遷があり、その間団体組織が不安定な状態だった。そういった経緯もあり、シドニーパラリンピック辺りからようやく障害者スポーツにおいても競技性が注目されるようになってきたのに、知的障害者に指導をすることへの逆風が強かった。しかし結果を出す中で養護学校以外の教育界から少しずつ意義を理解されるようになり、盛り上がってきた地域ではクラブ化が進み、レベルも上がってきて本来目指している形に近づいてきた。</p>
⑦その他	



—まず、日本知的障害者陸上競技の歴史について簡単に教えてください。

■当初、国内では「全日本手をつなぐ育成会連合会」と行政が主導していました。そこに1980年代にスペシャルオリンピックスが日本に入ってきます。これはいまのスペシャルオリンピックスとは違う組織です。ここではチャンピオンシップ的なこともやっていました。そして、これらが中心になった全国大会を始めました。■その後、1992年からゆうあいピックが始まります。ゆうあいピックが始まると行政や育成会はこちらに基盤がうつります。また、スペシャルオリンピックスはチャンピオンシップを目指さない本来の活動方針の組織に変わりました。■そうするとチャンピオンシップを目指していた私たちの活動は宙に浮いた形になってしまいました。やっぱり知的障害のある人たちもチャンピオンシップ・・・勝ちたいとかタイムを縮めたいとかいうふうに、もう本当に素直に思っただけのために練習している人もたしかに結構大勢いるんですよ。その人たちがやっぱり行き場を失ったわけですね。その後も紆余曲折を経てそうした人たちの受け皿となる組織を1999年に作りました。これが現在の日本知的障害者陸上競技連盟です。その後はここが中心となって強化合宿をしたり、海外の大会に選手を派遣したりするようになりました。■ただ、当時は知的障害のある人を強化するということがなかなか理解してもらえず、苦労しました。「なんでお前毎日そんなしごきみたいなことをやって」「養護学校の週1回で十分なんですよ」「一般の高校生で走れるわけがないですよ」とか、「走ったら危ないです」「迷惑が掛かる」など。特に地方では逆風が強かったですが、生徒とか保護者の後押しもあって少しずつ理解されるようになりました。

—現在の組織の状況について教えてください。

■現在登録会員数は約250人、障害のない人の組織のように各都道府県に協会があり、それらを全国組織が束ねるという形ではなく、選手は個人やクラブを通じて登録しています。クラブの中には特別支援学校を卒業したOBたちが中心になって作っているような組織が多いです。■会員数が少ないので会費だけで大会開催や合宿などの事業を実施することはできません。JPCからの補助金が支えとなっています。幸いにも去年うちの連盟は海外大会で金メダルとか世界新とか、表彰台独占などがあって、かなりいただけるようになりました。今年も合宿とか会議、強化会議、そして発掘とか、考えられることが全てできたほど、潤沢に事業費がありました。■その他日刊スポーツからの支援で日本IDフルマラソン選手権を行っています。他には自転車振興会から支援をいただいています。■事業はマラソンのほかに日本知的障害者陸上競技選手権の開催、ジャパンパラリンピックの共催、関東や九州での地域選手権、強化合宿、海外遠征、それらに伴う諸会議の開催などです。■事務局は千葉にあります。非営利活動法人（NPO法人）を運営されている方が事務局長で、NPOの経営者であることから連盟の事務を執り行う時間を調整しやすいこともあり事務が滞るようなことはいまのところありません。■連盟のコーチは現在20人くらいいます。そのうち10名が国際大会に帯同するような人たち、残りの10名くらいが国内合宿をサポートしてくれているような形です。これらのコーチは強化合宿などに選手の引率できた人たちの中で指導力等を見たうえで、「今度は自分のクラブチームだけのためだけじゃなくて日本全体の知的障害の陸上競技選手のためになんとかやってもらえないか」というように声をかけ同意を得たうえで3日間のコーチ養成プログラムを受講してもらっている。■教

員や大企業の社員のような人がいます。海外遠征や合宿時の経費は実費にてコーチには支払うようにしています。教員の場合は職免等の制度を利用して海外遠征等に帯同することが多いです。そうした制度を使えるとはいえ、現実的には1週間、10日と職場をあけることとなりますから厳しいのは事実です。

―選手の発掘や普及はどのような形で行っていますか。

■5年ほど前からジュニア発掘のための大会をやるようになりました。日本知的障害者陸上競技選手権標準記録には届かないけど、ジュニアの記録とかアジアユースとかの記録を参考にしながら、それをちょっと少し下げて「この標準記録でやりますからどんどん集まってください」ということでやりだしたんですね。ここに参加した選手から将来性のある選手を見つけます。■もう一つ重要な大会は全スポ（全国障害者スポーツ大会）ですね。全スポの試合を丹念に見て、いい記録の者に、終わってから個人的に選手と保護者とか付き添いの人に「どうやって練習していますか」とか、練習環境とか支援体制とか聞いて、「こういう我々の団体、知っていますか」とかそうやって。全スポは、そういうクラブ化していないところから、県で1位とか2位の人が出てきているので、あそこは割と原石といわれるような類の選手がいるので、非常に貴重な機会ですよ。実際は全スポの大会を見に行くと10人いるかどうかですね。■今は大体参加標準記録に迫るとかそれに近い発掘したいレベルの選手はクラブチームに所属することが多くなっていますね。そういう選手はすでに把握しているという場合が多いです。■本来であればもっと一番低年齢の辺りを重点的に見て育てたいというのはあるんですけど、いまやっぱり、2020東京オリ・パラに6年と差し迫っていますので高校生ぐらいの年齢を重点的に注目しています。■その他知的の特別支援学校が500校くらいあるらしいのですが、日本知的障害者陸上競技選手権によく出てくるのは30~40校ぐらいですね。以前は「何とか支援学校」の所属で出てくる子も多かったのですが、参加標準記録が年々上がってきているので中高等部で部活らしきものも含めてやってきた土台があってさらに2~3年、18、19、20歳ぐらいになってようやくその標準記録を切れて、ということで。やっぱりクラブ化しているところから出ることが多くなっています。その点では私が目指している本来の形に近づいてきたわけですよ。特別支援学校体育連盟のようなところの大会もありますが、ほとんどが運動会的なレクリエーションになっているようです。

―普及や強化選手発掘をしていくうえでの組織としての課題は何ですか。

■個人的にはすでにジャパラなどでは実績を積んでいるのだから、日本知的障害者陸上連盟は日本パラ陸上競技連盟と早く統合して、障害者の陸上競技連盟としてしっかり固まって。その後で、日本陸連にということが必要だと思います。陸連には中体連、高体連、学連、実業団、マスターズとありますけど、そこにパラ陸上というように横並びで入れるといいと思います。そういう形で基盤強化整備をしたいというふうに、若手では思っています。ただ、いろんなしがらみがあるから一気にというのは難しいかもしれない。■身体障害者陸上競技連盟と統合していくことができれば身障陸連は各地域で大会を行なっていますからその大会の中に知的障害のクラスを入れてもらうことができます。そうすると地域の選手が大会に出場しやすくなり、普及面でもメリットが生まれます。■小さなハード

ルを一つずつクリアしていくしかないと思います。■経済基盤に関して言えば東京パラリンピックまでは補助金も潤沢に降りてくるでしょうが、その後を考えると企業からの支援も必要です。企業支援をいただいて経済基盤を強化していくためにもこれは必要だと思います。陸上競技の団体として「知的もある、聴覚もある、身体もある、盲人もある、なんだこれ」みたいな話になっては支援も受けにくいと思いますから。すでに企業からの支援は数件ありますが、今後のことを考えると組織の統合は必要です。

ー参加標準記録や海外の大会のレベルが高くなってきている中で今後、選手強化していくうえで必要なことは何ですか。

■これまでやっていた強化・発掘とジュニアユース大会、これでかなり発掘できるようになったので。あとは合宿回数を1ヶ月に2回ぐらいに増やすとか。これだけやれば選手自身にもいままで受けたことのないような練習内容、あるいはその指導者も指導方法のレベルアップ、向上にも繋がると思います。教える技術が高い指導者たちの交流の機会になるので。上層部はアンテナを高くして、世界の競技育成システムを絶えず勉強しながら若手の指導者の育成を図るということが必要になってきます。

ー東京パラリンピックで目標はありますか。

■パラリンピックでのメダル獲得はそんなにやさしいものではありませんが、日本は健常者と同じで長距離やリレーが得意なんです。国際知的障害者スポーツ連盟（INAS）の大会では5,000mで金メダルを獲ったり、短距離ではリレーで優勝したりしましたから。そこを重点的に強化したいんですが、パラリンピックには400m、1,500m、幅跳び、砲丸投げしかないんです。なので1,500mあたりのメダルを狙いたいのですが、ただもう各国とも強い選手を出してきます。この間のロンドンでも日本は9位10位で入賞を逃していますから、切磋琢磨していくしかないですね。



(編集責任：藤田紀昭)

## I 障害者スポーツ競技団体 3 野村一路

### ■ヒアリング概要

日時	2014(平成26)年10月15日	場所	日本体育大学
所属	非営利活動法人・日本障害者スキー連盟・専務理事		
回答者	野村一路		
聞き手①	海老原修 (横浜国立大学教育人間科学部)		
聞き手②	澁谷茂樹 (公益財団法人笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所)		
聞き手③	山本純生 (公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)		
編集	海老原修 (横浜国立大学教育人間科学部)		

### ■共通質問事項要約

①障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か	●例えば修学旅行でスキーに行く際に障害者の参加を止めてしまうケースが多く、その子供はスキーと出会う機会を失ってしまう。現状ではどんな場所にも指導員がいる体制ではないが、派遣などは行っているの、学校に対してこのような場合はぜひ連盟に声を掛けるようにという発信をしていきたいと思っている。
②障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か	
③2020オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか	

### ■競技団体質問事項要約

④組織基盤強化の難しい面は	●障害者スキーの団体は成立背景の違いから複数が並立し、対外的に分かりにくい状態にあった。そのため統一組織として日本障害者スキー連盟が平成13年に発足したが、いまだに組織の一本化はなされておらず、強化費の配分や連盟本体の資金集めなどが上手くいっていない。そこで今年からは、よりスピード感を持って一本化を進めるため、コンサルティングなど様々な分野から外部の人間を入れて新しい体制づくりに取り組んでいる。
⑤人材発掘についての課題と展望を教えてください	●今年連盟の理事の入れ替えを行った際、選手の発掘に適したネットワークを持っている人を意識して理事に選んだ。また、日本身体障害者スキー協会の各県連の中でも、障害者スキーの普及に力を入れている県と個別に協力していこうと思っている。時間はかかるがそのような過程を経て新しい体制に変わっていくことが必要だと思っている。
⑥人材育成についての課題と展望を教えてください	●現在の「障害者スポーツ指導員」の資格では、特に初級は指導員とは呼べないと思う。また、実際は特定の種目しか指導できないこともあり、資格が機能していないようにも感じる。 ●指導員養成の講習会を行っている協会もあるが、現状ではそれを受けても指導ができるようになっていない。実際にトップクラスの選手を指導しているのは障害のないコーチで、スキーの一流コーチをであることの方が前提。様々な障害のある人でも上達できるように考えながら指導することが大事なのであって、指導員の資格を付けることにはあまり意味を感じない。
⑦その他	

### ＜障害者スキー小史＞

アメリカより自身片足スキーヤーであるコリン・S・カドウェルが1959年、来日時にアウトリカーを持参し、日本で障害のある方に紹介した。またスキー選手の笹川雄一郎が1971年にカナダに遠征した折アウトリカーを持ち帰り、「スキージャーナル」誌上で紹介し、その普及を呼びかけた。これに応じた8名が1972年に第1回全国身体障害者スキー大会を開催した。その後1973年に日本身体障害者スキー協会を設立した。1976年には車いすユーザーのためのチェアスキーの開発が始まり、1980年に日本チェアスキー協会が設立された。日本の障害者スキーは日本身体障害者スキー協会と日本チェアスキー協会が両輪となり、日本代表選手を選考。さらに1998長野五輪開催にむけたJOCまたは長野オリ・パラ実行委員会による、XCスキーの育成・養成・強化を全日本スキー連盟(SAJ)に依頼した。この依頼を契機に長野五輪後に日本障害者クロスカントリー協会を設立。ここに至り、日本身体障害者スキー協会、日本チェアスキー協会、日本障害者クロスカントリー協会の3団体が並列する。2002ソルトレイク・パラリンピック前年の2001年、前述3団体を統合する日本障害者スキー連盟を任意団体として設立、翌2002年にNPO法人化。ここに日本知的障害者スキー協会(NPO法人取得済み、2002年設立)が4番目の正会員団体として加盟。現在、NPO法人日本障害者スキー連盟の傘下には、日本身体障害者スキー協会(任意団体)、日本チェアスキー協会(任意団体)、日本障害者クロスカントリー協会(NPO法人)、日本知的障害者スキー協会(NPO法人)の4団体が所属する。

### ＜課題1＞障害者競技スポーツの公的資金援助のシステムについて

■日本パラリンピック委員会(JPC)は国庫助成金の一部となるパラリンピック代表選手強化育成費用を各競技別団体に支出するので、その窓口はNPO法人日本障害者スキー連盟です。連盟は身体(立位)とチェア(座位)の2つの団体から構成されるアルペンとクロスカントリーという合計3つのナショナルチームに区分され、その強化費を渡す仕組みです。そのような中で、連盟が主催する事業は、①ナショナルチームの編成・派遣事業、②全日本選手権に相当するジャパラスキー競技大会事業、③普及・講習会となります。

### ＜課題2＞障害者スキーに係わる組織基盤のガバナンスとコンプライアンスについて

■クロカンの事業はJPCと本連盟が共催しますが、実質的には日本障害者クロスカントリー協会(NPO法人)が、アルペンの場合は日本身体障害者スキー協会(任意団体)、日本チェアスキー協会(任意団体)、日本知的障害者スキー協会(NPO法人)の3団体がそれぞれ主管する。この組織運営上、日本障がい者スポーツ協会(JPSA)や日本パラリンピック委員会(JPC)が形式的に関与しますが、実質的な競技運営などさまざまな事業には基本的に関与しません。そんな状況です。■現在、障害者スキーに関与する事務局は、日本身体障害者スキー協会、日本チェアスキー協会、日本障害者クロスカントリー協会、日本知的障害者スキー協会、そして連盟本体という5つの事務局があるんです、一つの組織の中に。さらに、時限付きで組織されるナショナルチームの事務機能にも同じような役職は入り組む組織運営となっている。また、障害者スノーボード協会(一般社団法人)がNPO法人日本障害者スキー連盟への加盟申請を提出されているのが現状です。■NPO法人日本障害者スキー連盟の体制盤強化の経済的基盤は国庫となる強化費ですので、当然強化の現場でしか

使えない。この強化費からは連盟の運営にかかる事務局経費等は支出できませんので連盟本体の運営資金を集めるというのがスポーツ団体の共通の課題です。仲介企業やスポンサーの専属部門を通じて、アルペンチーム・クロカンチームにはスポンサーが付くんです。たとえばユニフォームのロゴがあります。メダルを獲れば露出する分だけ企業の宣伝効果が期待されるので、アルペンチーム・クロカンチームという指定のスポンサーは付きますが、連盟本体を応援するスポンサーは皆無です。■本連盟の運営収入は年会費1団体10万円、正会員団体4つからの年間40万円プラスアルファの事業収入となる。そこで連盟の基盤強化という意味では、連盟として如何に必要な資金を獲得するかというのが最重要事項です。事務局機能も週3日というお願いでパートタイム体制。新体制にあたって事務局設置、専従事務局員採用を優先しました。■車椅子バスケットボール協会が専従の事務職員を置いてやる事と、スキー連盟がパートタイムとは言え何某かの職員がいて、本格的にこれから障害者スキー連盟も事務局体制を整えて、これだけの中でやっている大会事業が4団体合わせるとこんなにあるのですから、普及講習会もやっていますし、教室もやっていますし。これを連盟として全部やる形にしないと一本化は実質ならない訳で、各協会もこれまでやってきた事をやめるというのは情情的にもイエスとは言えない訳で。これを全部連盟でやります、とそのために必要な費用を取ってきます、と言わない限りなかなかならない。ただ色々対策を練るためにコンサルの専門家にも副会長にも入って頂きましたし、広告代理店の執行役員を理事にも入れ、パラリンピアンをアルペン委員長に据え、法務などの専門家も理事として入れ一本化に向け具体的な策を講じているところです、今。

**<課題3>組織基盤強化に向けた組織再編を重点的に説明いただきましたが、発掘・育成の視点で障害者スキーがどのような取り組みをされていくか。**

■理事構成を考える時に、選手発掘という事を前提に、筑波大学理療科教員養成の方を選出し、盲学校等とのネットワークをつくり始めた。さらに障害者スキー委員会を設置するSIA(日本職業スキー教師協会)と全日本スキー連盟(SAJ)から理事の派遣を要請した。筑波大学理療科教員養成から招いた先生にはブラインド対策委員長をお願いした。■この視点で組織運営を振り返ると都道府県単位になるとスムーズな流れがある。日本身体障害者スキー協会のある県支部では、身体障害者、知的障害者、チェアスキーヤーと一緒に加盟している。ある障害者スポーツ協会にも同じような仕組みをもっている、と仄聞する。■さらに地域単位で魅力的な取り組みとしてNPO法人アダプティブワールドがある。全米障害者スポーツセンター(National Sports Centre for Disability)におけるプログラムを導入したプロが教える障害者専門のスキースクールもある。こんな取り組みが増え始めている。

**<課題4>障害者スポーツにおける専門的指導者とボランティアの峻別**

■2020パラを目指して養成するのは初級の運営ボランティアと割り切る改革のタイミングかもしれない。その対極には専門的な指導者養成、本当の指導とは運動指導の処方箋を準備実践できる上級レベルです。上級じゃないと指導者と呼んじゃダメですね。中級は上級が書いた処方箋に沿ってその方の運動を指導する、処方箋書けるレベルじゃないですから。初級は完全にボランティアですよ、一緒になってスポーツ楽しむというレベル。■養成は身体障害者スポーツ大会の運営スタッフの確保ですよ。そこでオリ・パラがくる時にそ

の視点で組み換えがあっても。今の各大学とか専門学校の免除適応コースじゃないですけど、初級取っても使わないからって結局最初の更新はしないというのが繰り返される。

―障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か。

■たとえば修学旅行でスキーに行く際に障害者の参加を止めてしまうケースが多く、その子どもはスキーと出会う機会を失ってしまう。現状ではどんな場所にも指導員がいる体制ではないが、派遣などは行っているので、学校に対してこのような場合はぜひ連盟に声を掛けるようにという発信をしていきたいと思っている。

―組織基盤強化の難しい面を教えてください。

■障害者スキーの団体は成立背景の違いから複数が並立し、対外的に分かりにくい状態にあった。そのため統一組織として日本障害者スキー連盟が平成13年に発足したが、いまだに組織の一本化はなされておらず、強化費の配分や連盟本体の資金集めなどが上手くいっていない。そこで今年からは、よりスピード感を持って一本化を進めるため、コンサルティングなど様々な分野から外部の人間を入れて新しい体制づくりに取り組んでいる。

―人材発掘についての課題と展望を教えてください。

■今年、連盟の理事の入れ替えを行った際、選手の発掘に適したネットワークを持っている人を意識して理事に選んだ。また、日本身体障害者スキー協会の各県連の中でも、障害者スキーの普及に力を入れている県と個別に協力していこうと思っている。時間はかかるがそのような過程を経て新しい体制に変わっていくことが必要だと思っている。

―人材育成についての課題と展望を教えてください。

■現在の障害者スポーツ指導員、特に初級は指導員とは呼べないと思う。また、実際は特定の種目しか指導できず、資格が機能していないようにも感じる。■指導員養成の講習会を行っている協会もあるが、現状ではそれを受けても指導ができるようになっていない。実際にトップクラスの選手を指導しているのは障害のないコーチで、スキーの一流コーチであることの方が前提。様々な障害のある人でも上達できるように考えながら指導することが大事なのであって、指導員の資格を付けることにはあまり意味を感じない。



(編集責任：海老原修)

## II 障害者スポーツコーチ/スタッフ 1 峰村史世

### ■ヒアリング概要

日時	2014(平成26)年10月30日	場所	株式会社サーベイリサーチセンター本社
所属	MINEMURA ParaSwim Squad		
回答者	峰村史世		
聞き手①	齊藤まゆみ (筑波大学体育系)		
聞き手②	田中暢子 (桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部)		
聞き手③	山本純生 (公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)		
編集	齊藤まゆみ (筑波大学体育系)		

### ■共通質問事項要約

①障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か	<ul style="list-style-type: none"> <li>●発掘という点では、今イギリスが行っているような、学校からブリティッシュスイミングで連携するようなシステムがあれば、全然違うと思う。今年、日本障がい者水泳連盟ができたことで、スイミングクラブ協会などと上手く手を組んでいけると良いのだが、連盟の母体が小さいため、なかなか手を広げられないのが現状。</li> <li>●また、JISSナショナルトレセンのような、いつでもプールを利用でき、専属のコーチやスタッフのいる施設が東京近郊に1つあると、発掘の次の対応に繋がる拠点になると思う。</li> </ul>
②障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か	<ul style="list-style-type: none"> <li>●選手強化とは、半分は指導者強化だと思う。選手にだけお金がつく様なシステムでは絶対にだめ、指導者を育てる意識が必要である。</li> </ul>
③2020オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか	<ul style="list-style-type: none"> <li>●今の体制のままでは水泳で決勝の舞台で活躍できる選手は育たないと思う。連盟は目の前のことをこなすの精一杯で、ボランティアが片手間でやるという形も限界を超えているように思う。</li> </ul>

### ■コーチ質問事項要約

④強化につながる先進的な試みについての意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>●水泳指導者は最低限それぞれの障害の種類について勉強し、リハビリなどサポートの形で関わる人は水泳の基本的なことを学び、その上でそれぞれが得意分野を活かせる指導者になっていくと良いと思う。現状ではこういう障害だとこういうサポートが必要といった知識が、コーチ陣に欠けていると感じる。</li> <li>●基盤強化の部分で、JPCにはもっと指導力を発揮してもらいたい。自分としては、指導者、トレーナー、クラス分けの3つを1つのチームとして強化を捉えていくようにしていきたい。</li> </ul>
⑦その他	



### －障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か。

■タレント発掘で言うと、これだけ全国にスイミングスクールがあるので、そこでの連携で選手の情報をピックアップ出来て、それに対して次はどういう対応をするのかを考えるべきだと思う。たとえば障害者スポーツのナショナルトレセンのような、パラスイマーがいつでも使えるプールがあれば、ピックアップした選手を呼んで来ることができる。たとえば東京、トップ選手が東京近郊に多いので、そういう所が1つあってそこに専属のコーチやスタッフがいて、学校や仕事に合わせて来ることができるようになると、まずは1つ場所が提供できる。そしてそこに専属の指導者もいればちゃんとしたコーチングも出来る、つまり拠点になる所が必要である。普段の練習はそれぞれの地域でやってもいいが、定期的にチェックが出来る、たとえば週末の金曜日の夜に出てきて土日まで、ミニキャンプみたいな形式で若手のクラスだったりトップ選手だったりというスタイルがよい。日本水泳連盟では、毎週末にミニキャンプで中高生が集まる。候補となる選手の中で希望参加という形らしいが、対象となる選手はほとんど参加するのでそれに合わせてコーチ陣も来る。同目標を持つ選手たちが切磋琢磨する事自体がすごく大事だ。特に障害者は普段1人で練習していることが多いので、集団でやるというのは色んな意味がある。だからミニキャンプが出来る環境が必要だと思う。■スイミングクラブとの連携は国内にはない。それが出来れば全然違う、日本身体障がい者水泳連盟としてもすごく感じている。私は以前から主張しているが、イギリスはその形を取っているので、通常学校に対象となる障害者がいる場合はイギリスのブリティッシュスイミングの方に必ず情報をあげるという様なシステムだと聞いている。ようやく今年、日本水泳連盟の中に日本障害者水泳連盟という3つの障害（身体、知的、ろう）を合わせた団体が位置付けられた。それができた事で都道府県の水泳連盟も障害者の部分を考える必要性がでてきた。今後は、少しずつ状況が変わることを期待する。お金さえあれば（タレント発掘で）私は全国を飛び回りたいと思っているが、そんなに簡単にはいかないで、少しずつ（障害者水泳の）存在を認知してくれる所が増え、一般のスイミングクラブとかのコーチとも話しが出来る様にはなってきていると思う。パラ対象になる軽度の障害がある子どもってもっといるはず、指導者自身（障害者を指導していると）気付いていない場合もある。軽度だと障害があることになかなか気付けない。弱視もそうだが、泳ぎに関しては外見ではわかりづらいので、発掘で言うと連携がもっともっと出来るといいなと思う。海外ではタレント発掘が上手くできている。一般の大会にでている選手とか学校とのリンク、うまく情報共有ができる仕組みがある。タレントがないと言っている割には（日本とは比較できないくらい）新しい選手がでてくる。

### －障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か。

■国の支援と意識改革が必要である。成績を残した競技団体には、スタッフを雇用出来る様な国の支援がないと継続できない。私がプロのコーチをやっている事について、（障害のある）人に指導してお金を稼いでいるということに対して、最初は「信じられない」と言う人の方が多かった。声には出さないが、「障害者から金を取るのか」ではないが、それに近い反応があった。そうではなくて「パラリンピックで勝ちたいと思ったら、それだけの努力が必要だ」というのは選手もそうだが、スタッフ、コーチ陣も然りと思っているので、責任を持ってやるべき事だ。だからこそ自分はやっている。でも、現状では職業として出

来る人は少ない。選手強化と言っても選手にしか目がいていない。選手強化とは、半分は指導者強化だと思う。選手にだけお金がつく様なシステムでは絶対にだめ、指導者を育てる意識が必要である。強化のシステムは、それぞれの競技団体に運営は任せているが、障害者スポーツ全体の体制として、まだまだ任意の競技団体が沢山ある中では JPC などが競技団体の自立・独立・基盤を作る所にもっと支援すべきである。

ー2020 オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか。

■2020 に向けた強化プランは本当に人手が足りないという状況です。最近すごく自分で悩むことの1つが「ちょっとお願い」ということ。「ちょっとお願い」というのは、今までよくやっていたパターンだとは思いますが、私はプロコーチとして（お金をとって）やっている以上、責任を持ってやっている訳で、たとえばトレーナーにお願いするのに「ちょっとお願い」というのは、してはいけない事だとは思いますが、しかし一方で、「でも…」という風に思う時もある。じゃあお金が払えるかと言うと払えるものでもない、どこまで払えるか、やはり選手に負担がどんどんかかる。水泳は比較的金がかからないとは言われつつ、それでも負担というのは心苦しい。結局そこを越えてしまう様なものを求めていたら成り立たないと思っている。だからこういう（プロコーチ）職業が成り立たないのだと思う。そういう意味で言うと、指導者強化、スタッフ・トレーニングのスタッフも含めての強化を考えていかないと本当の意味での良いシステムは作られていかない。強化において繋がるという意味で言うと、システム的な部分と関わる人間のメンタル、本気で、覚悟を持って、ボランティアという考えの枠を取っ払うことを期待する。

### ー強化につながる先進的な試みについての意見。

■水泳競技の場合、水泳指導者が障害のある選手の指導に入ってくる場合が多いので、最低限それぞれの障害についてはやはり勉強すべきだ。たとえばチームに帯同する時に（障害のない水泳チームと）一番違うことは、介助やいわゆるお世話、コーチ陣でもかなり負担が求められる。水泳だけ教えてればいい訳ではない。日常生活を含めた、障害のある人という部分の知識を併せて持つこと、たとえば、こういう障害だとこういう事はサポートが必要だとか、排尿の問題を全く知らなかったら、生活のリズムと練習時間の兼ね合いを考えることは難しい。また、個人の機能障害からくる問題なのか、性格なのか判断しきれない状況がでてくると思う。基礎的な事を知らないと、適切な対応ができない。最低限自分が関わる選手の障害、特に切断とか欠損とか、麻痺の形態によってもそれに付随して脈がなかなか上がらない等を知らなければ、ただ単に練習で手を抜いたと思ってしまう。一方で、障害・リハビリ等の障害者のサポートという形で水泳指導に来る人には、たとえば水泳の基本的な事というのを学んでいくべきだ。その2つの部分を最低限備えた上で、自分の得意分野を活かせる様な指導者になっていくシステムが大切だ。■指導者強化も大切だが、トレーニングのスタッフも含めての強化を考えていかないと本当の意味での良い意味でのシステムは作られていかないとと思う。指導者、トレーナーとクラス分けの3つを1つのチームとして強化を捉えていくようにしていきたい。クラス分けといってもメディカルのクラス分けは理学療法士（PT）かドクターなどの医学的な専門家が必要なのだが、テクニカルのクラス分けは水泳の指導者が関わるができる。強化においては、ボランティア状態ではなく、責任の所在を明確にしたチームとしての取り組みが必要である。



（編集責任：齊藤まゆみ）

## Ⅱ 障害者スポーツコーチ/スタッフ 2 丸山弘道

### ■ヒアリング概要

日時	2014(平成26)年10月8日	場所	株式会社サーベイリサーチセンター神田事務所
所属	株式会社オフィス丸山弘道		
回答者	丸山弘道		
聞き手①	高橋義雄 (筑波大学体育系)		
聞き手②	岡本純也 (一橋大学大学院商学研究科)		
聞き手③	山本純生 (公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)		
編集	高橋義雄 (筑波大学体育系)		

### ■共通質問事項要約

①障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か	<ul style="list-style-type: none"> <li>●日本では車いすの人は健常者からジロジロ見られたりするので、本人の心境になると自分からお金を払ってスポーツを習いに行く勇気が出ないと思う。まずはそのような環境をオープンなものに変えていく必要がある。</li> <li>●協会がイベントを行うにしても、協会スタッフは全員ボランティアベースなので厳しい状況。協会専従のスタッフを配置すればもっと幅広い活動ができると思う。</li> <li>●マネジメント会社の人間は、所属選手が出場する時には海外でも現場に足を運んでいたりする。このように色々な大会を見ながら、選手のサポートとともにビジネスに繋がるヒントを得ようという姿勢は大事だと思う。</li> </ul>
②障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か	
③2020オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか	<ul style="list-style-type: none"> <li>●車いすテニスの将来を考えると、2020年以降が勝負だと思う。誰かに期待をするというよりも、障害者スポーツだけでお客さんが来るという世界を作るために、この6年間は全国津々浦々を回って車いすテニスのファンをつくり、車いすテニスを知らない人がいないぐらい全国的に広めていきたい。</li> </ul>

### ■コーチ質問事項要約

④強化につながる先進的な試みについての意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>●いつでも気軽に参加できるオープンな環境を形成することが先決だと考えています。たとえば車いすに乗った人達とコミュニケーションを取る機会を幼稚園・小学校での授業の一環として持つとか、ボランティアとして活動させるだとかはそんなにハードルは高くないと思っています、海外ではすでに実践例がある。</li> </ul>
⑦その他	

—まず、車いすテニス指導に関わる様になった経緯などをお聞かせください。

■私の専門はジュニア（テニス）の強化という事で、これからプロを目指す子どもたちを育成するというのが私の仕事のメインでした。それプラス、当時吉田記念テニス研修センター（TTC）の吉田理事長が障害者スポーツすなわち「車いすテニス」という事に関して力を入れていこうという機運があり、手を上げたのがスタートです。実際その前から、当時の車いすテニス日本ランキング 1 位の選手にコーチを依頼されてはいました。ただ私も当時は障害者選手のことが分からないので、ヒッティングパートナーとして受けたというのが現場としてのスタートでした。切り口としては当時日本のトップ選手が指導のスタートで、そこできっかけを掴み彼らと一緒に試行錯誤しながら、車いすテニスコーチとしてのレッスン方法を体得していきました。この経験を踏まえ、国枝選手に出会えたことは、車いすテニスコーチとしては非常にラッキーだったと思います。

—障害者スポーツ選手を指導する上での御苦労はありましたか。

■車いすテニス選手ということであれば、選手個々の障害の部位、たとえば腹筋が全て可動するか否か、そういう事で指導自体がかなり変わります。内臓機能の疾患や欠損の状態にも注意を払う必要もある。一つのエピソードを紹介します。当時、私が車いすテニス大会に出場する選手の帯同コーチをしていた時のことです。決勝の前日、彼は左足欠損なのですが、その欠損している左足が痛いから練習しない・・・と。私はそれにカチンときて、「アテネで金メダル目指したい」って言っているのに、そんなやる気のない奴になんで私がテニスを教えなきゃいけないと大喧嘩になりました。今でこそゴーストペイン（幻肢痛）という症状があり、その痛みの軽減策や治療法を理解していますが、当時私はゴーストペインにより選手が精神的に追い詰められていることを何ひとつ知りませんでした。そこで彼が私に「コーチに正直に話しをします」と。彼が一晩中ゴーストペインに苦しんで寝られなかったから少しでも体力を温存したいので練習しなかったと。その話しを聞いた時に、なんでこんな事も知らないで私は彼らのコーチだと言っているのさばっていたのかと。自分のあまりの「無知」さに気づかされました。彼らと共に一所懸命やるのであれば、彼らと同じフィールドに乗らなかったら話しにならない。ただテニスだけ指導して成績だけ伸ばせばいいというのは私欲でしかなく、これは本当の意味でのコーチングではないなど。結局コーチ稼業というものは、人と人との繋がりをテニスというフィルターを通して、コーチと選手という立場に分かれますけども、彼らとどうしっかりと人としてぶつかり合うのか、二人三脚で行けるのかという所に本来の醍醐味がある。と考えるようになりました。

—当時 TTC を中心にして拮がった日本の車いすテニスというのはどういう状況だったのでしょうか。

■90年代後半位から強化プログラムをスタートしており、当時なかなか TTC のようなオープンなクラブというのはありませんでした。選手は関東近郊を中心に静岡、遠い所では大阪からも来ていました。トップ選手を多く輩出していたということもありますが、2000年の初めの頃は車いす選手だけで1番多かった時は40人位いたと思います。ある意味聖地となっていたのかもしれませんが。一方で、障害者スポーツは皆が皆、選手を目指していたかというところではなくて、人とのコミュニケーションや情報交換の場として、皆が集うひ

とつのコミュニティのような感じでした。土日になると「あいつがいるから行こう」みたいな、そんな感じで人がどんどん集まってくる様になりました。その中で選手としてトップを目指す人・皆と楽しむ人・それと国枝選手たちの練習を観る人だとか、様々な人たちが揃っていたので、私としてはスポーツというものの受け止め方を肌で学んだ時代でした。やはり日本はスポーツというのはどうしても「する」のがスポーツだという認識が皆さん多いじゃないですか。だけど海外なんか行くと「観る」という事をスポーツとして捉えている方が、結構多いですね。特にヨーロッパなんかはそう。だから車いすの選手たちがそのようにやっているのを見て、これは良い形で車いすプログラムが育ってきているな、というのは当時すごく感じていました。

ー丸山さんはロンドン以降 TTC を離れましたけれども、これは何か他にチャレンジしたいとかそういう事があったのでしょうか。

■自分の年齢的なものも考えますと、現場コーチとしては 50 才半ばまでかなと、私は個人的には感じていました。そこからの自分のキャリアを考えた場合、今後マネジメント能力が自分には必要なんじゃないかと考えるようになりました。これまでテニス業界に携わってきて、私は TTC しか知らなかったもので、テニス界にコミットした以上は現実をもっと見て、ゆくゆくは次の世代のコーチに対してメッセージを残したいとか、協会に対して国内における現実問題の投げかけとか、主体をマネジメントのほうへ移したいという話しを TTC にしました。退職後紆余曲折もあり、2020 年東京に向けて、トヨタ自動車がバックアップしてくれる事が決まり、プロコーチとして引き続き国枝選手や三木選手といったトップ選手を指導しています。私のようなプロ指導者が増えてくれば、障害者テニス界全体が変わってくるのかなと思いますし、自分の使命としては企業が選手にではなく、コーチをバックアップするという稀有な試みに対して、ちゃんとした良い前例を作りたいなとすごく思っています。これからの若いコーチたちに障害者テニス専任コーチでも食っていけるというのを証明したいです。コーチが企業に支援してもらってというのは、企業スポーツのコーチだったらあり得ますけど、完全なプロとして、しかも障害者スポーツでという例としては初なので。そういった意味では相当なプレッシャーもあります。しかし、同時にワクワク感もありますね。

ー今後車いすテニスを普及・強化していくためのアイデアをお聞かせください。

■そうですね。まだまだ車いすの方々自身がお金を払って習いたいという所まではいってないですね。車いすテニスというスポーツを知り、自分がもしかしたらそういう状況になったらやるかもしれないと思ったときに、いつでも気軽に参加できるオープンな環境を形成することが先決だと考えています。たとえば車いすに乗った人達とコミュニケーションを取る機会を幼稚園・小学校での授業の一環として持つだとか、ボランティアとして活動させるだとかはそんなにハードルは高くないと思っています。海外ではすでに実践例があり、2003 年にポーランドで車いすテニスの国別対抗戦が行われたのですが、その日程に合わせて小学校・中学校は学校をお休みにして、そこにボランティアに行っておボールボーイだとか売店に立つだとか、そういう事を子どもたちにさせていました。担任の先生に「この子どもたち普通に学校あるでしょ？」って聞いたら、「いやいや、これが学校だろ」って

そう言うわけですよ。「だってこれ以上の授業ないだろ？お前どう思う？」って逆に聞かれて、そりゃそうだなと。ちょっと会場から離れたところでも、車いすの選手が上り坂にさしかかって留まっていると、ランドセルを背負った小学校 3~4 年生くらいの子も達が、さも当たり前のようにその車いすを押しはじめて、坂の上まで来た時には「バーイ」なんて帰って行っちゃうわけですよ。あとはもう本人が自力で行けるというのが分かっている。「目からうろこ」とはこういうことを言うのでしょうか。■日本で例をあげると、以前車いすテニスの三木選手と一緒にジュニアプログラムを実施したときに、最初子どもたちは、三木選手と話す事も出来なければ、目を合わす事も出来ないで戸惑っている訳ですよ。それが、1ヶ月も経てば、ペラペラしゃべって普通に「三木さん、車いす乗らせて」だとか、ちょっとした段差があったら「ちょっと手伝おうか」とかってそんな事言いながら、自然に障害者のサポートをやっちゃう訳ですよ。■日本でも環境さえ整えば、スムーズに障害者スポーツを受け入れられる土壌が広がっていくと感じています。

#### ー日本車いすテニス協会のこれからの取り組みについてお聞かせください。

■まず私は、車いすテニス協会内に専任がいない、給料が出ないという状況の中でスタッフがほぼボランティアの形態で仕事をしていることが厳しい状況だと思っています。たとえばイベントやりますよといった時にも、自助努力だけでは非常に厳しい現実を突き付けられることとなります。結局、受け身のイベントしか出来ない訳で。たとえばもっとスポンサーを付けるという事であっても、協会自体がそれをやるっていう事も現状ではなかなか難しいわけです。この世界が発展していくために協会の将来像を考えれば、やっぱり協会自体がきちっと自立していくという事が大事です。今の協会に専任スタッフ制度を設け、毎日実働できるメンバーで執行部を固めることができれば、もっとレスポンスの良い動きとなり、幅広い活動ができると思います。現状では、動ける人たちが各クラブ、テニスクラブに所属していると本業の仕事が目一杯で、協会の仕事まではなかなか手が回らない。テニスコーチでも協会専任でやれますという方々が 2~3 名いれば、彼らが 47 都道府県を網羅し、普及活動も含め改善が期待出来るのですが、今はとにかく空いている時間でお手伝いしますよというのが我々の限界な訳です。3 人ぐらい専従で、たとえば協会内に専従職員としての予算が付けられるようになれば、一気に協会の活性化が図られ、改善できるというイメージです。

#### ー2020 年以降の障害者スポーツのビジョンを教えてください。

■障害者スポーツの自立を目指し、障害者スポーツだけでクラブが成立するという世界を作っていきたい。2020 年以降それが実現できればと思います。国枝選手、三木選手などのトップ選手だけ指導していれば良いというレベルではなくて、ここからの 6 年間は普及活動も含めて、全国津々浦々回って車いすテニスをどんどん広めていきたいと思っています。潜在的に車いすテニスをやりたいという人たちがまだまだ日本全国に多くいると考えています。特に国枝選手や、上地選手を目指そうとする子どもたちが増えてきていると思います。一方で競技としてスタートさせるには現実な問題もきちんとと親に伝えないといけません。ランキング対象の大会を年 15 大会ぐらい回らないと、世界ランキングもままならない。それを回するには、国内での大きな大会は 3 大会ぐらいしかないので世界を回らなけれ

ばなりません。そうすると年間 400 万円ぐらい遠征費かかります。それを何年も何年も続けて初めてトップに上り詰めることができる。初めからスポンサーは付きませんから、その費用は親御さんたちが捻出することになります。と言うと皆さん驚かれます。まだまだ日本においては、障害者スポーツに関しての認知は、本当にリハビリレベルで手厚くやってもらえるという認識しかないわけです。障害者スポーツに携わってきたものとして、まずは包み隠さずそういった現実的な問題をきちっと関係者に伝えることは非常に重要だと考えています。障害者スポーツが受け入れられる環境に関しては先ほど話しましたが、早い時期での啓蒙教育を実践していくことで、土壌は改善されると思っています。地道な土壌を整備していかなければ普及も強化も本当の意味では出来ないかなと正直思っています。障害者スポーツの普及、育成に適した場所があっても、手つかずの原っぱでどうにもならない状況が多く、まず鋤を入れることからスタートしていかないと全然スタートが切れないと思います。その中から上位を目指し本格的に競技をやる選手が現れ、その競技を指導するスペシャリストがキーパーソンとして、説明責任を含め、正しく方向付けをしていくことが今後必要になってくると思います。土壌が改善され、種まきするべき適正な期間にきちんと種まきをして、水を撒き、良い循環ができるまで、課題は山積みで、まだまだやる事は沢山あります。



(編集責任：高橋義雄)



## Ⅱ 障害者スポーツコーチ/スタッフ 3 臼井二美男

### ■ヒアリング概要

日時	2014(平成26)年10月29日	場所	鉄道弘済会義肢装具サポートセンター
所属	公益財団法人・鉄道弘済会義肢装具サポートセンター		
回答者	臼井二美男		
聞き手①	岡本純也(一橋大学大学院商学研究科)		
聞き手②	高橋義雄(筑波大学体育系)		
聞き手③	石塚晋(公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)		
編集	岡本純也(一橋大学大学院商学研究科)		

### ■共通質問事項要約

①障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か	<ul style="list-style-type: none"> <li>●障害者の大会は、大きな大会でも観客が身内だけという状態。学校の授業で観戦などを取り入れると良いと思う。選手は見てほしいと思っ て頑張っている。</li> <li>●障害者スポーツはマイナスイメージが根強い。健全ではないイメージを一蹴するためにもヘルスエンジェルスを行っている。スポーツに関わると心身ともにたくましくなると思う。</li> </ul>
②障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か	<ul style="list-style-type: none"> <li>●選手のための、大会のルールなどに関する情報ネットワークがない。</li> <li>●現在は予算を強化合宿、強化練習会に使っているだけなので、今後はそのようなことや板バネなど器具のレンタル等の充実も必要。</li> </ul>
③2020オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか	

### ■コーチ質問事項要約

④強化につながる先進的な試みについての意見	●若い選手は情報が不足しており、自信もないので、こちらから他の種目を提案するなど投げかけを行うことが大事だと思う。
⑦その他	

—白井様が陸上競技クラブを始めようと思ったきっかけはどのようなものだったのでしょうか。

■義足の人・義手の人で自分から進んでスポーツを始めようとする人はほとんどいなかった。当初はスポーツをしている人自体が少なかった。しかし、何とかスポーツに関わって障害者というマイナスなイメージを一蹴する機会をつくりたかった。障害を持った時点でみんな健全ではないという自己イメージを持っていて、そこから脱却するのにスポーツはすごく効能が大きいと考えた。身体的なメリットもあるが、特に心理的なメリットは大きい。まずはスポーツに触れるところから始め、目標をつくり、継続していくと競技スポーツにステップアップしていく。最近のマスコミなどは競技スポーツから入ってくるが、障害者のスポーツとしてはリハビリの段階から行える方に大きな価値がある。だから国を挙げてパラリンピックを支援する価値はあると思う。なぜならば、障害を持った人がスポーツをすることそのものに価値があるというベースのところにも多くの人の注目が集まるからである。パラリンピックでメダルを獲るなどより、もっと手前に価値があるということに気づくことに大きな意味があると考えている。

—そのようにとらえると、鉄道弘済会に白井様と装具士の方々、理学療法士の方々がいて、不幸にも脚を切断してしまった方々がクラブ（ヘルスエンジェルス）の活動が見えるような所（鉄道弘済会）でリハビリを開始し、クラブの活動を横目で見ながらリハビリを継続していくということには非常に意味があるのではないのでしょうか。

■はい。脚を切断した子どもや若い人の場合、何もしないと車いすの生活になってしまう可能性が高い。支える家族も切断当初は子どもを育てなきゃいけない、仕事もなきゃいけないということで精一杯になる。そのような時にみんな揃ってスポーツに関わると心身ともに結構たくましくなる。癌が原因で脚を切断せざるを得なかった子どもをもつ両親は少しでも元気になってほしいという願いから、クラブに必死に子どもを連れて来るが、スポーツに触れることで子どもは考え方が前向きになり明るくなる。また、人との協調性が出てきて、病気をはねのける様な身体への影響も感じられたりする。それまで障害を理由に家から出なかつたり、勉強しなかつたり、人とも話したくないと言っていたりしていた子どもが、スポーツをやっていると性格も明るくなるのがハッキリ分かる。

—同じ苦しみを共有している仲間が出来るという点はすごく大きいのではないのでしょうか。

■先輩から得ることのできる、義足での生活の知恵のようなものは大きい。義足になって短期間で家にもどると、障害をもって生活をしている者は自分以外いないので、義足に関わる悩みを多く抱えることになる。スポーツに関わっているとそのような悩みへの対応策や解決策が多数の先輩から同時に得られることになる。そうなると、今までは「今日はここにちょっと傷が出来たから学校（会社）を休む」などと言って親を困らせていたのが、言えなくなってくる。「みんなこの程度の傷では学校や会社に行くのだ」という感覚が当たり前になってくると、社会性・社会参加の度合いがどんどん高くなっていく。これもまたスポーツの大きな効能である。

—そのようなりハビリとスポーツを結びつけることの重要性に着目すると臼井様が鉄道弘済会に在るといことが非常に重要だと考えられるが、このシステムは属人的に臼井様の熱意で続いていて、長期的にみた場合、そこが弱点ともなるのではないか。

■最近では若い装具士や理学療法士が協力してくれるようになってきている。また、鉄道弘済会の屋上に調整用の走路を作ってもらったことで選手が調整のために来られるようなシステムもできている。トップ選手になってくると個人練習中心に移行し、一人または複数人で集まって練習をするようになる。個人的な要請で調整をするために練習場所などに赴くこともあるが、6年前から屋上に調整用のコースができたことによって選手の方から調整に通って来られるようになった。

—健常者の陸上競技クラブとの交流はあるのでしょうか。

■たとえば江東区夢の島陸上競技場や足立区の記録会に障害者の選手は出ている。障害者の大会は年間に7つ程度しかない（都民大会・埼玉大会・関東大会・日本選手権・九州チャレンジ等）。タイムを計測する機会が少ないので健常者の記録会に出ているのだが、最初の頃に困ったのは、クラウチングスタートが義足の人には難しいという点。当時はタイムの測定にスターティングブロックが連動していて、それを使用しなくてはならないとのことで、クラウチングが必須とされた。現在は理解がすすみそのような点はクリアされたけれど、日本陸上競技連盟が進んでそのような情報を発信しているわけではないので地方の大会では今でも混乱があるのではないか。

—陸上競技連盟のサポートの現状についてお教え下さい。

■現在は強化合宿や強化練習会などのサポートが中心で、その他に費用を割り当てるといことはほとんどされていない。そこから先の、たとえば車いすレーサー（競技用車いす）や義足をもっと陸連で購入し、初心者などにレンタルしていくといったシステムを作ることなどには至っていない。研究などを共同で進めたいという申し出は去年から複数の方面からいただいている。新たな板バネの開発や世界中の板バネを評価して役立てたいなどの話しはあるが、選手に直接役立つ義足具・義足の製品化まで一緒するのはなかなか難しい。現段階では、やはり北区や国立市の障害者スポーツセンターに機器や備品を用意して、それをレンタル出来るようなシステムを作ることサポートしていただく方が大いに成果が上がると思う。

—アジアパラ競技大会に行かれて日本の課題などは見えてきましたか。

■今までは中国・韓国・タイには比較的車いすと義足の選手はいたのですが、今回の大会ではインド・パキスタン・イランからの選手が急に増えていた。おそらく国が義足と車いすなどを支給していると思われる。これまでインドの義足の選手は見たことがなかったが、今回は世界的にも最先端の装具を身につけていた。

ーリハビリを行い陸上競技で走れるようになり、他の種目にシフトしていく選手はいるのでしょうか。

■「ヘルスエンジェルス」は基本的にそのようなことを奨励する方針をとっている。義足で走る動作ができるようになることが主たる練習内容であるが、そこからボートやトライアスロン、自転車などへ移っていく者もいる。自転車に移る場合には、まずは普通の義足で練習し、ある程度選手を目指すようになったら専用の装具に変えていく。スキーはアルペンだと大体は義足を使わない。義足を使うのはクロスカントリー（ノルディック）。あとはチェアスキーになる。

ーリハビリから陸上競技へ、そして他の種目へというルートを繋げるということも白井様の重要な仕事となっているのではないのでしょうか。

■はい。若い人はあまり情報をもっていないし、他種目へチャレンジしていく自信もないので、こちらからある程度「こんな種目の方が向いているのではないか」などのアドバイスをして道筋をつけてあげることが結構大切になる。今も、たとえばこの間のソチにスノーボードの日本選手はいなかったが、今はピョンチャンに向けてトライし始めた選手が出てきている。このようなアドバイス、そして新たなチャレンジに結びつく装具の調整ができるような人材が重要になる。そのような人材を育てるために若手の装具士に、現在経験を積みさせている。

ーということは、先ほどの備品や装具のレンタルのシステムは装具士とセットになっていないと意味がないですね。

■はい。王子にある北区のスポーツセンターに義足を置いておいても選手と施設のスタッフだけでは多分使えないと思われる。義肢装具士がセッティングや調整でそこに関わっていないとシステムとして生きてこない。車いすは置いておくだけでも価値はあると思われるが、義足に関しては義肢製作所が必ず介入しないとなかなか個人で使えるところまではセッティング出来ないだろう。

ーこれまでの話をまとめると、鉄道弘済会と白井様、「ヘルスエンジェルス」のインフォーマルな結びつきにより上手く回ってきたから現在の成果に結びついているということになりますね。これを別の所に全国展開するとしたら白井様が何人もいるしかないということになるのでしょうか。三重の加藤先生（大和鉄脚走行会主催）のような方が出てきた場合にサポートするとしたらどのような方法が必要なのでしょう。

■多分、今、加藤先生が1番求めているのは板バネ（競技用義足）である。ご本人も「義足の選手にはスポーツ用の板バネがすぐ貸し出せると良い」とおっしゃっていた。リハビリを始めたばかりの中学生の親御さんに「これはスポーツ用の特別な板バネなので30万円するが、購入していただけますか？」とは言えない。そのような場合、レンタルできる板バネが加藤先生の所にあり、それをすぐに貸し出せるということができればお子さんの可能性を伸ばすことができるはずである。われわれの場合には今仙技術研究所との共同研究で使用した5年前の板バネを貸し出したことで選手の育成に役立った。2年間のプロジェクトでフィールドテストを実施した後の板バネが多く手元に残り、それを調整しながら貸

し出し用に活用してきた。来年も研究費で4枚の板バネを制作し、4人を対象に貸し出しを行う予定である。基本的に競技用以外の義足には公費保障が適用され、ほぼ無償で使用することができる。それに対して競技用の義足は20万円～45万円ほどの費用がかかり、やはりコスト面で障壁となる。しかし、板バネの貸し出しによってリハビリから走ることへの移行がスムーズにいけば、その後の運動能力だけでなく、生活の質を高める可能性を大いに広げることになる。



(編集責任：岡本純也)

## Ⅱ 障害者スポーツコーチ/スタッフ 4 桜井智野風

### ■ヒアリング概要

日時	2014(平成26)年10月8日	場所	株式会社サーベイリサーチセンター神田事務所
所属	桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部		
回答者	桜井智野風		
聞き手①	澁谷茂樹（公益財団法人笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所）		
聞き手②	山本純生（公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団）		
聞き手③			
編集	海老原修（横浜国立大学教育人間科学部）		

### ■共通質問事項要約

①障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か	●実業団が車いすのチームを作り強い選手が育っていくのが、より身近に感じてもらう上で理想的。自分自身もその機会を作るために強い選手を作らなければならないと思っている。
②障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か	●現状では、マスコミのスポーツ選手の扱い方に、健常者と障害者で差がありすぎる。そこから直していけば状況は簡単に変わるのではないかと。車いすの選手がいかに強いのか、いかにすごいのかということ、マスコミに取り上げてもらう努力をしていきたい。
③2020オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか	●北海道で車椅子バスケットやウィルチェアーラグビーなどのセッションイベントを開催した際、他の競技の人が皆「連盟がバラバラで動きにくく、強化に持っていけない」と話していて、共通の問題を抱えていると感じた。2020年に向けては、現状の色々ある組織をスリム化していく努力が必要ではないかと思う。 ●健常者の陸連との連携も進めたいが、先方の態度はノーではないものの、障害者の陸上競技連盟からのアプローチもなく、つかれないと動けないという状況。2008年の大阪の選手権のような健常者と障害者の融合した形というのは、ぜひやっていかなければいけないと思う。

### ■コーチ質問事項要約

④強化につながる先進的な試みについての意見	●東京はトレーニング場所がないので、自分が指導している選手は美幌のんびりした土地に帰ってトレーニングをしている。そこでは周りの人が彼のことを皆知っており、自動車も注意して走ってくれるなど自然な気配りができている。東京ではなかなか難しいかもしれないが、そのような環境があると良い。地方都市で週末に小さい大会を開くなどといった試みも良いと思う。 ●指導している久保選手は、車いすの他にクロカンをトレーニングに取り入れていることで、押す、引くの両方のトレーニングができており、そこから彼なりの新しい勝ち方が出てくるのではないかと考えている。筋電図でどの部位が使われているかなどの研究を進め、そういう方面でも攻めていきたい。それでトレーニングの方法を変えていくと、何か面白いことが出てくるのではないかと考えている。
⑦その他	

久保恒造選手(パーソナルトレーナー)

桜井智野風・桐蔭横浜大学・スポーツ健康政策学部・スポーツテクノロジー学科教授

久保恒造：高校 3 年生の時、交通事故により脊髄を損傷し下半身麻痺となる。スキー選手となる前は障害者車いすマラソンの国際大会で活躍。2007 年に荒井秀樹監督と出会い、クロスカントリースキーを開始。2008 年 2 月のジャパンパラリンピッククロスカントリースキー競技会では、初出場で優勝。2008 年ワールドカップノルウェー大会に出場。2009 年ワールドカップバイアスロン年間総合ランキング 2 位。2010 年バンクーバーパラリンピック大会のクロスカントリースキーロングで 7 位、バイアスロンロングで 6 位入賞。2011-12 年ワールドカップにてバイアスロン年間総合ランキング 2 位。2012-13 年ワールドカップではバイアスロン年間総合優勝。2014 年ソチパラリンピックに出場し、バイアスロンショートで銅メダルを獲得した。2014 年 4 月より車いす陸上競技へ転向。

#### 論点 1. 障害者スポーツ指導者の専門性

ーバイアスロンでは射撃の指導を受ける久保選手は、クロスカントリースキーの技術指導や体力づくりのトレーニングは特定の指導者がいないまま、我流だったのか。

■ハンドエルゴによる上半身の最大酸素摂取量は体重あたり 70ml/kg/min. で全身を用いるマラソン選手に匹敵する。基礎体力の重要性を再確認するとともに、技術指導の限界もまた確認できる。職務や練習環境を考慮しながら、上半身の専門的なトレーニングや季節に応じたトレーニングの個別メニューを試行錯誤しながら作成する中で、とりわけ休養を考慮したピーキングを強調した。いわゆるパーソナルトレーナーを実践する結果となり、それは障害者スポーツ指導者の専門性を問いかける問題に発展します。

ーところで、北海道・美幌町には自衛隊があるので射撃を指導してくれるのではないか。

■一般には教えてくれませんが。射撃の練習では猟友会の方が篤志的にかかわりますが、練習場に最適な自衛隊のコースは利用できません。練習では実弾を撃ちませんので、銃を使ったビー玉による射撃訓練を猟友会の方々に指導してもらっていた。銃の免許を持っている方が北海道・美幌にはいなくて、網走市にいました。そのような猟銃の射撃場を網走は持っているんですね、そう言う面で良かったみたいですね。このような指導者の専門性のあり方はバイアスロンにおける射撃の練習に色濃く反映しています。■その状況でも銃は抜群なんです、世界ナンバーワン、所謂バイアスロンでは 5 発撃つがほとんど外さない、がしかし走る方はそれほど強くないんです。射撃とクロスカントリースキーの複合的な練習環境を調整する中で、パラリンピックのバイアスロンに 2 回出ていたんですけど全然勝てない状況の中で、網走市の障害者担当職員が桜井先生に問いかけるチャンスをもつという繋がりを準備してくれたんです。

#### 論点 2. 障害者スポーツにおける科学的トレーニング環境～ハンドエルゴメーター・ローラースキー用トレッドミルとウィークエンド大会～

ー久保選手とかかわる中で、練習・トレーニング環境の面でやりづらい状況とその解決私案はありませんか。

■パフォーマンス水準を自己点検できる身近な大会をスイスに確認できます。彼(久保選手)がスイスに行く理由は抜群に良い環境をもつからで、車で30分位走ると田舎で、週末ごとに車いすの大会が開催される。日本でもバリアフリーに力を入れた地方都市がそう言う大会を開催したり、自治体で車いすのトップアスリートの強化拠点を準備したり、そのような試みがあってもよいかもしれない。■全国のいくつかの大学が障害者スポーツの特定種目の拠点となる。たとえば、車いすを使用する種目には車いすが走れる大きさのトレッドミルが欲しいんですよ。幾つかの大学で試行しており、北海道教育大学岩見沢分校がもっている。したがって、2020東京オリ・パラの合宿地選定では、パラ競技に絞って、北海道内強化合宿の合宿地の取り纏めを岩見沢市が検討中と聞いている。自治体と大学が合同でパラ競技のハブ拠点となる構想。■ローラースキーで漕げるトレッドミルを試作する考えは、作れば作れないことはないと言われていると医療機器メーカーと論議している。

### 論点3. 健常者と障害者の合同トレーニング

ー現在、国の政策となる総合型地域スポーツでは、多種目・多世代・多志向を实践する苦勞が多いなか、陸上競技は多世代クラブ形式でやり易く、同じ競技場で練習したり、異なる種目となる投擲と持久系と一緒に練習したり、陸上競技ファミリー感が出来上がる可能性があります。その中に車いすとか障害のある人がナチュラルに入っている光景が一般化すれば、自然に触れて行く感じと言う点で陸上は比較的やり易いんじゃないか。

■夏の網走は実業団のマラソン・駅伝チーム、日本の一線級の拠点で、久保さんと一緒に練習風景を見ましましょうと出掛けました。夕方からトラック練習を始める前に久保さんがちょっと練習したり、実業団選手と久保さんが技術面やトレーニングについて話しているんです。こう言うのって大切だなと思って。僕の理想は実業団に車いすのチームをもってもらうこと。夏の網走に行くと、久保さんと実業団の選手が合同で練習をやっている光景が見られますよ、と内外に宣伝する。非常に良い、ああゆう事って中々無いと思います。

■障害者と健常者の競技選手が同じ施設を利用する際のルールづくりをする。車椅子バスケットやウィルチェアーラグビーなど車いすの人が走ったトラックを健常者を利用しても問題ないし、並走しても取り立てた問題はない。走り幅跳びと砲丸がやっても、やろうと思えばできるはずなんですよ。そう言う事をシステムティックに作って行くことが必要なんだ。たまたまお手伝いした網走は比較的そう言う面では優れている。■現在、岡山県に車いすのマラソンランナーと健常者が一緒に運動することができる「桃太郎夢クラブ」という総合型地域スポーツクラブがあります。■障害者競技選手が健常者と同じトレーニングメニューを科してトレーニングに励むやり方を志向すべき時期にあり、連動するスポーツ競技で健常者と障害者が一緒に大会に出場したり練習したりする風景が日常的になることが望まれる。

ー障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か。

■実業団が車いすのチームを作り強い選手が育っていくのがより身近に感じてもらう上で理想的。自分自身もその機会を作るために強い選手を作らなければならないと思っている。



－障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か。

■現状では、マスコミのスポーツ選手の扱い方に、健常者と障害者で差がありすぎる。そこから直していけば状況は簡単に変わるのではないか。車いすの選手がいかにか強い、いかにかすごいかということ、たとえばNHKの特番「ミラクルボディ」に取り上げてもらうとか、メディアへの露出拡大を進めていくことが重要と考えています。

－2020 オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか。

■北海道で車椅子バスケットやウィルチェアラグビーなどのセッションイベントを開催した際、他の競技の人が皆「連盟がバラバラで動きにくく、強化に持っていけない」と話していて、共通の問題を抱えていると感じた。2020年に向けては、現状の色々ある組織をスリム化していく努力が必要ではないかと思う。■健常者の陸連との連携も進めたいが、先方の態度はノーではないものの、障害者の陸上競技連盟からのアプローチもなく、つつかれないと動けないという状況。2008年の大阪の選手権のような健常者と障害者の融合した形というのは、ぜひやっていかなければいけないと思う。■車いすマラソンの練習ができる環境がスイスには身近にあるので、久保選手はスイスをしばしば訪問する。日本では北海道にその可能性がある。

－強化につながる先進的な試みについての意見。

■東京はトレーニング場所がないので、自分が指導している選手は北海道・美幌ののんびりした土地に帰ってトレーニングをしている。そこでは周りの人が久保選手の事情を皆知っており、公道で練習する際に自動車も注意して走ってくれるなど自然な気配りができている。東京ではなかなか難しいかもしれないが、そのような環境があると良い。地方都市で週末に小さい大会を開くなどといった試みも良いと思う。■指導している久保選手は、車いすの他にクロカンをトレーニングに取り入れていることで、押す、引くの両方のトレーニングができており、そこから彼なりの新しい勝ち方が出てくるのではないかと思っている。筋電図でどの部位が使われているかなどの研究を進め、そういう方面でも攻めていきたい。それでトレーニングの方法を変えていくと、何か面白いことが出てくるのではないかと思っている。



(編集責任：海老原修)

### Ⅲ 障害者スポーツ選手 1 鈴木徹

#### ■ヒアリング概要

日時	2014(平成26)年11月7日	場所	株式会社サーベイリサーチセンター本社
所属	ブーマージャパン株式会社		
回答者	鈴木徹		
聞き手①	齊藤まゆみ (筑波大学体育系)		
聞き手②	田中暢子 (桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部)		
聞き手③	山本純生 (公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)		
編集	齊藤まゆみ (筑波大学体育系)		

#### ■共通質問事項要約

①障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か	●競技に専念したことで講演会の依頼が増えてきている。これも知ってもらうために必要なので、プロ的に活動することは有効だと思うし、そのような選択肢が増えたのは良いことだと思う。
②障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か	●中高から大学までの体制は良いが、大学を卒業した後の受け入れ体制が難しい問題。企業の受け入れ先は増えてきたが、コーチがいない、ついていけないか不安、といった問題への対応が必要。なので大学を通過して社会に出ていく流れを作りたい。
③2020オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか	●競技を続けられる環境、ここに入ればどうにかなるといふ拠点が必要。 ●仕事との両立でモチベーションが維持できるような環境とセカンドキャリアを見据えた大学との連携。

#### ■選手質問事項要約

④あなたがパラスポーツに関わったきっかけ、経緯を教えてください	●大学入学時から陸上競技を始めた。その後で怪我を経て復学した時に高跳びをやってみて、たまたま日本記録を更新したのがきっかけ。日本代表に憧れていたので元々目指していたハンドボールではなく、陸上を選んだ。大学に戻る前に障害者スポーツセンターで三井さんから日本のレベルなどの情報は聞いていた。
⑤現在のトレーニング環境に関するご希望をお知らせください	●選手にはメダル獲得などの目標があるが、どういう作戦を立てるかなど、中身の話がない。マルチサポート事業を今回初めて受けたが、そのようなパーツが少ない。ナショナルトレセンも使いにくい。 ●自分達はやればやっただけ赤字になってしまうので、強化費がもう少しあればまた違うかなと思う。 ●国内に室内競技場を作りたい。現状では冬季は沖縄に行ったりするので費用がかかる。トレセンの中であれば一番良い。
⑥競技を継続するための条件整備をお知らせください	●プロの選手になりたかったので、スポンサーを獲得するために多くの企業にアプローチしたが、ほとんどの人はパラリンピックのスポーツを知らない。結果を残すことでもっと知ってもらうということが重要。 ●全体的に支援体制の環境改善のスピードが遅い。海外の選手はチームとしての結束力がすごく高いが、日本では選手個人に委ねられるのがきつい。
⑦その他	

### 一障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か。

■知ってもらおうという事である。そこで、収入に関係なくプロ的な活動をして、義足のアスリートを知ってもらわなければならないと考えた。当時、スポンサーとしてアプローチした企業のほとんどの人はパラリンピックのスポーツを知らなかった。また、車いすの選手を見たことはあるが、義足で競技をするということを全く知らなかった。プロとして結果を残す事も大事だが、プロとして活動することで障害者スポーツを知ってもらおうという事が一番大きい。

### 一障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か。

■経済的な基盤、セカンドキャリアを見据えた環境が必要だ。仕事をすると練習時間は勿論削られることになる。また、海外遠征に行くにあたってはどうしても1週間とか2週間ぐらい仕事を休むことになる。そのため、これまでの先輩たちは企業ではなく役所（公務員）勤務である。企業だとなかなか休みが貰えず、結局みんな企業に入っても肩身が狭くなるから役所に入っていくパターン、それ以外の選択肢も競技を続けるために必要である。自分がプロでやることで、ロールモデルを示せば後輩の選択肢が増えると思う。■次に、セカンドキャリアが保障されることである。いずれは陸上の指導者を目指しているので、そのために大学院で勉強しながら、また大学で練習しながら、リオの大会を目指したい。パラアスリートがそのままコーチになるというのは、今まで日本ではほとんどない。当事者のアスリートが指導者になるというのはすごく新鮮である。前例がほとんどないのでそれを目指すべきだと感じ、大学院に進学する。そういう意味で大学との連携が競技スポーツを続けるために重要である。

### 一2020 オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか。

■日本のシステムとしてプロのコーチがないという事が一番のマイナス点である。プロではなくても、ナショナルトレセンで複数年コーチとしての契約をし、じゃあ次のパラまではコーチとして保障されるというシステムがあればずいぶん違うだろう。それから、競技に関して分析してもらった経験がほとんどない。一応スタッフがやってくれるが、合宿や試合のデータを貰うだけなので、そこからどうしてこうという話しが出来ない。そのデータ班もコーチではなくあくまでも分析の人なので、強化の中心である専門の指導者が必要である。現状では、研究者からデータを貰っても、そこからどうしていくというのを自分で考えなければならない。そこでコーチが（強化の）真ん中にいれば、そこから連携がとれ、必要なデータを研究者と出していくことができる。研究者も「これが欲しい」という要望があれば動きやすいと思うが、要望がなければとりあえず標準的なものの提示に留まる。そういう連携を大学レベルでやった方が良いと思う。もう1つは大学の中に競技力の高いパラリンピックスポーツクラブのモデルを作る事である。そのクラブに所属することを起点に、大学できちんと勉強も出来るからセカンドキャリアにも繋がることを示す。指導者になるにしても企業に行くにしても、社会で生きていく力も大学で結び付けながら競技も出来る環境を整えていきたい。

—あなたがパラスポーツに関わったきっかけ、経緯を教えてください。

■受傷後、障害者スポーツセンターに半年くらい、そこでプールやウエイト、歩く練習から少しずつ走ることも始めたが、競技用の義足を使うのは大学復学の1ヶ月くらい前、切断してからは約1年、使いこなすまでには時間がかかった。それは、事故の傷だったので縫合部が傷つき、常に絆創膏をつけて歩く練習もしていたし、無理矢理走っていた印象がある。陸上競技を始めたのは2000年の4月、筑波大復学後陸上部に入って、そこから本格的に陸上を始めた。高跳びは小中学校の頃にちょっと経験があり、校内陸上記録会や県でも結構良い記録だったのでその印象があった。そこで筑波大に復学する前に陸上競技場で競技用の義足を使って走ってみたら100mを20秒ぐらいかかってしまった。これではちょっと（もともと専門であった）ハンドボールとしては厳しいと感じた。ちょうどそこに、跳躍用のマットがあったので高跳びに挑戦させてもらったら、その当時150cmの日本記録を超え165cmだった。事前に障害者スポーツセンターの指導員からもパラリンピックという事を聞いていたので、勿論ハンドボールでオリンピックに行きたかったが、日本代表になるという事で陸上を選んだ。

—現在のトレーニング環境に関するご希望をお知らせください。

■パラリンピックの支援体制は、全体的にスピードが遅い。トレーナーが競技場にいない、選手の専念出来る環境も徐々に改善されてはいるが、海外と比較すると国の支援も含め遅れている。ナショナルトレセンに選手がいて、そこにコーチがいて教えて貰うという環境もオーストラリア、アメリカ、中国等の海外では標準的である。日本は個人で頑張っているという印象が強い。自分にはプライベートコーチがいるが、そのコーチは学校の教員なので実際の競技現場には行けないことが多い。ロンドンパラは来てくれたが、今回のアジアパラはダメだった。陸上競技も日本代表というチームで試合に行くが、普段はみんな個人で頑張っていることが多いので、最終的な勝負の時に（コーチのアドバイスが得られず）個人に委ねられ、すごくきつい面がある。海外の選手はチームで動いているから結束力、チーム力がすごく高い。それはお金の問題ではなく、そういう体制を作っていないと勝てない。今の日本は代表と言ってもチームで活動できていない。普段やってないのに、いきなり試合に行くとメダルを獲れと言われても、スタッフが言う事、選手が言う事がそれぞれ違う状況では厳しい。海外みたいにチームでやってきて獲れなかったらこちらにも責任があるし、獲らせられないスタッフも悪いと思うが。日本はまだ選手がそれぞれ孤立している状況で、みんながそれぞれ違う方向に頑張っている。もちろんゴールにはメダルがあると思うが、もっと日本代表として合わせた方がいいし、そのような環境づくりが必要である。

—競技を継続するための条件整備をお知らせください。

■経済的な基盤が必要不可欠である。大学卒業後は選手としての道しか考えていなかったもので、いわゆる一般的な就職活動は1回もせずに、大学の先生の力を借りながら、（アダプテッド・スポーツが専門の）G先生や（陸上競技が専門の）M先生の力添えで、スポンサーを探した。とにかくプロの選手になりたかった。当時障害者スポーツでのプロ選手は車いすで数名、土田和歌子さんとか廣道純さんとかしかいなかったもので、出来れば立位の選

手でプロ第 1 号になりたいと思っていた。経済的なことでは、パラリンピック選手として強化指定に入っているのだが、オリンピックだと優勝経験があるレベルの選手だと大体招待選手なので、競技会に出場する場合も交通費も宿泊費も全部主催者負担だが、パラ選手ではそれがない。つまり海外遠征などはやればやっただけ自己負担で赤字になってしまう。エントリーもホテルも飛行機も全部自分で手続きしなければならないし、費用も自己負担である。合宿に対しての補助は勿論あるが、まだ不十分なのでとりあえず生活費を稼いでその中でみんなやりくりしている。そこに強化費があればずいぶん違う。



(編集責任：齊藤まゆみ)

### Ⅲ 障害者スポーツ選手 2 高田朋枝

#### ■ヒアリング概要

日時	2014(平成26)年10月29日	場所	日本スポーツ振興センター
所属	独立行政法人・日本スポーツ振興センター		
回答者	高田朋枝		
聞き手①	田中暢子 (桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部)		
聞き手②	齊藤まゆみ (筑波大学体育系)		
聞き手③	山本純生 (公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)		
編集	田中暢子 (桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部)		

#### ■共通質問事項要約

①障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か	●現在のゴールボール協会はパラリンピックに行くための活動でいっぱい いっばいで、普及に手が回っていない状況。普及のためにはもっと色んな人 に知ってもらい、興味を持った人がちゃんと関われる環境作りをしていかな いと、結局世界を目指すということも上手くいかないのではないかと。知って もらうということでは、例えば定期的に学校で障害者向けの体験会をしてい くのが良いのではと思う。
②障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か	●体験会などでゴールボールに興味を持つ人が出てきても、指導者やスタッ プなど一緒に練習してくれる人がいないと選手は定着しない。特に小さい頃 からスポーツをしていなかったような人には、ゴールボールは1人で練習する のが難しい。そのため、地域に指導者がいて、そこから選手が生まれるとい う環境作りが必要だと思う。
③2020オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか	

#### ■選手質問事項要約

④あなたがパラスポーツに関わったきっかけ、経緯を教えてください	●最初は水泳や陸上をしていた。初めてゴールボールをやったのは高校1年。 その時はあまり興味を持てなかったが、怪我で出られなくなった選手の代打 で大会に出て、試合の緊張感、悔しさや嬉しさを経験するうちに面白いと思 うようになった。陸上も大学卒業まで並行してやっていたが、仲間のいる ゴールボールの方が続けやすかった。
⑤現在のトレーニング環境に関するご希望をお知らせください	●ナショナルチームと普段通う学校ではコーチが別だったが、ナショナル チームのコーチはピリピリしていて違和感があった。地元のコーチは放任主 義で、その方がやりやすかった。 ●北京オリンピック前まではトレーナーはいなかったし、栄養指導もなく、 それぞれ自己判断で対応している感じだった。北京オリンピックでトレー ナーから色々な話を聞いて、それから皆が意識し始めた。アテネの頃からそ ういうことはあったのかもしれないが、若手には伝わっていないようだ た。
⑥競技を継続するための条件整備をお知らせください	
⑦その他	

－障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か。

■ゴールボールは、今のコーチ陣が初期のころからゴールボールを研究し、競技技術が伝えられてきた。しかし、そうした知識が若手のアシスタントコーチに断片的に伝えられているにとどまり、若手のコーチが選手を全体として把握・指導することが難しい状況に陥っている。だからこそ、指導法がシステムの引き継がれていく重要性を感じている。しかし、自分自身も含め、こうした現状に危機感を感じていないのではないかと思う。情報は入っては来ているが、理事や選手、若手のコーチに十分に伝わっているとは言いがたい。こうした現状が、結果的に普及につながっていかないと思われ、組織的な取り組みが重要であると考えている。

－障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か。

■ゴールボールの体験会を実施しても、そこに指導者やスタッフ、一緒に練習してくれる人がいないと、継続的な選手育成にはつながらない。せっかく体験会でゴールボールを体験しても、選手としての活動が続かないといったケースがたくさんある。実際に、元強化指定選手は、自宅から練習場所が遠かったために、一人で練習を続けることに限界があり、結局は競技をやめてしまった。こうした状況から、ある程度、指導者がいる地域に選手が生まれるという感覚がついてしまう。その競技を断念した選手は、練習嫌いなのではないかといわれたこともあったが、もともと小さいころからスポーツをやってこなかった人が、一人で練習をつづけることは難しかったと思う。簡単にはいえないが、水泳や陸上、サッカーと比べても、ゴールボールは、身近に指導者やスタッフがいなかったことが、競技の特性であるといえるだろう。身近に指導者やコーチがいなければ、選手にとっては、より競技活動を継続することが難しく、だからこそ指導者やスタッフを組織的に育成することは必要であると感じている。

－2020 オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するのか。

■広く知ってもらうために、まずはゴールボール協会の組織力を安定させ、そして、定期的に盲学校や普通学校に通う視覚障害児向けの体験会を実施することが望まれる。特に、2020年のパラリンピック大会に向けて、企業も含め、体験会に興味を持ってくれる人が増えているからこそ、企業や学校を含めた連携が必要であると感じている。■女子は、ロンドンでメダルを獲得し、ディフェンスには世界的な評価もある。しかし、男子代表は女子のように強いといったイメージはついてこない。今後、他国が日本との合同練習をのぞむような機会があれば良いと思う。

－あなたがパラスポーツに関わったきっかけ、経緯を教えてください。

■高校1年生の時に、体育で初めてゴールボールという競技を知った。その時はあまりゴールボールに関心は持たなかったが、選手のひとりが怪我をしたため、選手が必要となり、誘われるがまま軽い気持ちで大会に出場した。新人の私でも大会に出場できるということが魅力的であり、加えて、大会にある独特の緊張感や、悔しさや嬉しさを経験できたことが面白く感じられ、これを機に、ゴールボール部の練習に参加するようになった。しかし、ゴールボール部には所属せず、高校時代は、陸上部に所属し、関東盲学校陸上競技大会に

短距離走で出場していた。その後、大学を卒業するまで陸上の練習を続けていたが、伴走者がいないなどの理由で、ひとりでは十分な練習を続けることが難しいと感じていた。一方で、チーム競技であるゴールボールは、自分の性格にも合っていたことや仲間ができたことで続けやすかったと思う。週2回程度、大会前は週3回程度、社会人も参加できる夜の時間帯（18時から21時ごろまで）に、学校の体育館で練習を行っていた。■大学3年生ごろまで、パラリンピックという言葉すら知らずにいた。体育の授業でも、聞いた記憶がなかった。2004年のアテネ大会の出場権を女子が獲得したという情報も、パラリンピックの出場資格を獲得するための予選会とは結びついていなかった。実は、何かに挑戦したいという気持ちから、アテネ大会の第1回の選考合宿には参加していた。しかし、当時はパラリンピックの選考会という意識もない上に、選手の自己負担が約1万円と聞き、2回目の合宿には参加していない。とはいえ、他の選手とは意気込みが違うとは肌で感じていたため、軽い気持ちで練習に行っただけなのではないかと思ひ、ゴールボールとは一時期疎遠になった。■その2年後に、代表選手との雑談の中で、ゴールボールが話題となった時に「ゴールボールは面白かった」ことを思い出した。これを機に、再び競技に戻ることにした。練習場所は、筑波大付属の盲学校で週に2回、転勤したコーチの勤める聾学校で週に1回ほど練習をした。大学生時代は、片道1時間半をかけて練習場所に通っていたが、卒業後はゴールボール中心の生活となり、生活も就労の拠点もすべて都内に移した。ある日、世界選手権の代表候補の選考合宿があると聞き、参加したが、代表からは漏れた。当時は、ゴールボール協会は代表選手選考会に選手を招聘するという雰囲気ではなく、だれでも希望すれば合宿への参加も叶った。約10人の選手が、合宿に参加していた。世界選手権の代表には選ばれなかったが、2008年の北京大会には選考された。北京大会前は、アメリカが世界の何チームを招聘する非公認の国際大会に1度だけ出場した。北京大会前は、合宿も参加していたが、宿泊費などを入れると、毎月最低3万円かかっていたのは、正直、きついいところもあった。

#### －現在のトレーニング環境に関するご希望をお知らせください。

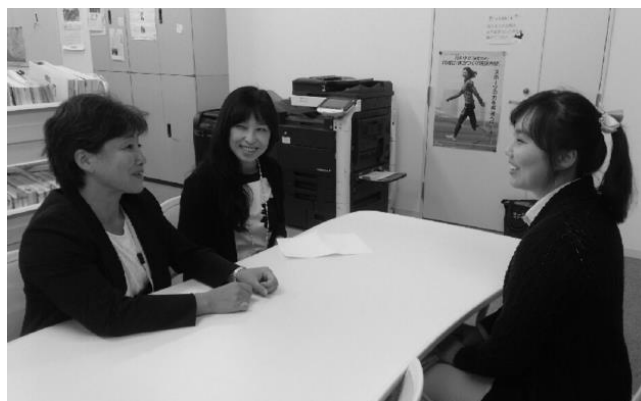
■若い選手が夢を見てパラを目指そうとしたときに、普及から強化を含む、組織としての明確な方向性と戦略が大事である。もちろん、コーチ陣が技術的な課題についての分析を基盤として、長期的な意味での戦略を立てる視点が必要と思う。若手が、6年後、10年後に目標をもって目指せる戦略が必要である。学校の活用も含め、見直すことはたくさんある。

#### －競技を継続するための条件整備をお知らせください。

■自身が出場した2008年の北京大会前は、トレーナーや栄養士も何もなかったため、自己判断で選手の体調管理がなされていたと思う。地元のコーチから教わることはあったが、ナショナルチームとして、直接的に、たとえば体幹を鍛えるために腹筋をやれといった指示はなかった。北京大会に出場を果たした際に、日本選手団つきのトレーナーから教わる事が多く、それをきっかけに選手みんなが身体のことに関する意識が高まったように思う。もしかすれば、一部の選手やコーチ、スタッフには既に高い意識をもっていた人がいたかもしれないが、特に若手選手を中心にチーム全体に広まっていなかった。■若手を



育成するには、競技団体はパラリンピックの出場資格を獲得する活動で忙しく、普及には手がまわっていないと思う。こうした状況を変えるためにも、興味をもった人がゴールボールに関わることができる環境を整備していかないと、本当の意味での普及、強化にはならないように思う。■ゴールボールは基本的に人材不足である。ゴールボールは、全国障害者スポーツ大会の種目には入っていない、パラリンピックにしかない競技である。そのため、そもそも日本全土に指導者数も少なく、導入部分としてのきっかけになりにくい。ゴールボール協会もゴールボールの指導者育成にまで手が回らない状況にあり、指導者や審判養成のための確立することが喫緊の課題となっている。加えて、協会に携わる人は組織運営のスペシャリストではなく、特にゴールボールは盲学校や特別支援学校の教員や、福祉施設の職員、もしくは障害者スポーツセンターの職員により運営されている。そのため、合宿や国内大会、自分自身の仕事をやるので手がいっぱい、実際に動ける人が少ない。それぞれが頑張っていたとしても、情報の共有や、戦略的に動くことがそもそも難しい状況にある。こうした環境の整備は、急務であり、スタッフが十分でなければ選手育成にも限界が出てくる。スポーツ協会としての転換を図るために、人材面からも改革が必要である。■こうした問題は、何も日本に限ったことではない。海外でも、指導者は選手の家族であったり、特別支援学校の教員だったりする。しかし、日本との違いは、たとえばフィンランドやカナダには指導者養成プログラムが確立されていることである。たとえば、視覚障害に関する基礎知識は、講習会で学び、次に競技特性を学ぶなどといったことも検討できるだろう。海外の事例で興味深いのは、男子が強いリトアニアの場合は、歩いて10分ほどの距離に選手が住み、ゴールが常設された体育館で日々の練習を行う。町が合宿所になっているようなイメージである。



(編集責任：田中暢子)

### Ⅲ 障害者スポーツ選手 3 成田真由美

#### ■ヒアリング概要

日時	2014(平成26)年11月7日	場所	読売ランド前駅某所
所属	横浜サクラスイミング		
回答者	成田真由美		
聞き手①	田中暢子 (桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部)		
聞き手②	齊藤まゆみ (筑波大学体育系)		
聞き手③	山本純生 (公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)		
編集	田中暢子 (桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部)		

#### ■共通質問事項要約

①障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か	●もっと知ってもらいたいのに、どうすれば上手く伝えられるか考えてしまう。イベントで体験してもらうなどの試みはしているが、続ける人は1人位しかいない。健常者のスイマーにもパラリンピックのことは知ってもらいたい。
②障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か	●若い選手が伸びていないので、選手発掘から始めていかなくてはならない。しかし『24時間テレビ』などでイベントをしても、それ以降は皆やめてしまう。続けるためには、施設のバリアフリーや施設までの交通機関の整備など、環境の整備が必要。対人的な心のバリアフリーもあるが、継続的に通うことができる環境を整えることで解消されていくと思う。
③2020オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか	●競技の世界に入るには、自分から動いて環境を手にするだけのやる気が必要。そのためにも競技云々以前に、健常者がエレベーターなどを利用する際は障害者に配慮してくれるなど、社会の意識面から変えていかなくてはならないと思う。そのためにも子どものうちから教育をしていきたい。その中でパラリンピックを知ったりとか、健常者と障害者が助け合ったりということ伝えていきたい。

#### ■選手質問事項要約

④あなたがパラスポーツに関わったきっかけ、経緯を教えてください	●13歳で発病する前にやっていたスポーツをまたやってみようと思い、17歳位から車いすのバスケットを始めた。それから陸上も始めたが、障害を持っている人から「25m泳げない？」と誘われ、かなづちであったのに一から練習を始めた。その後、最初の仙台の大会で新記録をマークしたこともあり、本格的に水泳をやるようになった。
⑤現在のトレーニング環境に関するご希望をお知らせください	●不満はない。車いすでも受け入れてくれたスポーツクラブ、トレーナー、ドクター、さらには筋トレの環境など、場面場面で良い巡り合わせがあり、日替わりメニューでトレーニングをしていく中で記録が伸びた。パラリンピックという明確な目標があったので、本当に楽しかった。
⑥競技を継続するための条件整備をお知らせください	●日頃指導を受けているコーチがパラリンピックなどの大会に同行できないのは残念ではあったが、ギリギリまでコーチについて徹底的に泳いで「じゃ、行ってきます」とやりきったと納得して大会に向かった。コーチとの信頼関係ができていたので、大会中も電話やメールで連絡を取り結果を出せたと思う。
⑦その他	

### ー障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か。

■オリンピック教育という中にパラリンピックという教育も含まれているので、学校のプログラムの中に入って行くといい。教科書にパラリンピック選手として私が紹介されていたが、個人的には教科書での選手紹介よりも体験がより重要であると考え。一緒に動く体験を通して、楽しいと感じて初めて分かることがある。選手に出会う機会や選手のパフォーマンスを見る環境も必要であるため、パラリンピックという授業があっても良いのではないか。パラリンピックをもっと実体験を通して教育することで、やがてはボランティア教育に繋がると思う。たとえば、ある中学校の講義に行ったとき、「僕は 2020 年の東京パラリンピックのボランティアに登録したいと思います」と感想文に書いてくれた生徒がいた。それは、私が行って話をして身近に感じてくれた結果ではないかと思う。小学校には、道徳という授業があり福祉が取り上げられているが、パラリンピックも題材となつてよいと思う。授業ではあるが、教科書で伝えるよりも、健常者の子どもに足を縛って泳いでみようとか、車いすに乗ってバスケットやってみようとか、みんなで身体を動かしてみようといった、パラ選手に近い疑似体験の方が子どもたちに伝わりやすい。昭和記念公園で開催される立川の車いすマラソンでは、健常者が車いすに乗って走ることが認められているように、私も小学校に行く子どもと一緒に泳ぐ。競争すると彼らも一生懸命になって泳ぎ、手だけで泳ぐ成田さんに負けて悔しいと感じる経験がひとつのきっかけとなり、パラリンピックという言葉覚えてくれるきっかけになると思う。

### ー障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か。

■職場の環境、家族の環境、スイミングの環境、筋力トレーニングをする環境、ドクターとの出会いなど、すべてに私は恵まれている。中でも、コーチとの出会いは大きかった。日替わりでトレーニングメニューをつくってもらい、全てコーチに任せてきた。その結果、記録が大幅に伸び、私自身も本当に楽しく練習に取り組めた。そもそもは、かなづちでもあり、入院生活が長かったので、部活動に参加しているような気分だったが、試合に出場すれば、1秒2秒は縮めることができたので楽しかった。楽な練習ではなかったが、パラリンピックという明確な目標があったから、限られた時間の中で出来る事を精一杯やっていたと思う。だからこそ、誰にも練習量では負けないという自負がある。負けない自分をイメージできるという事は日々の積み重ねがあったからこそであり、強い自分であられた理由であると思う。ライバルがどんな練習をしてきたかは知りたくもないが、50m自由形を 39 秒 22 で泳げるようになるまでに何百時間泳ぎ、何万回って肩を回してきたか、それが自信に繋がった。残念ではあるが、現在、日本には車いすの水泳選手が少ない。下肢障害者にとっては、水着に着替えることが大変だったりもするが、それでも水の中の新鮮さとか自由さは、他の競技にはないと思うから、若い選手にも水泳をもっと体験してほしい。誰もルールを引いてくれるわけではないから、家の中に閉じこもりがち障害をもつ人も、自発的に行動して殻を破ろうという気持ちが必要だと思う。

## ー2020 オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するのか。

■エレベーターに乗る時も、歩ける人が先に乗ってしまい、自分が乗りたい時には既に満員になり扉が閉まるという事が今なお日常的にある。このような状況で、本当に2020 オリ・パラを迎えられるのかと考えさせられる。変えて行かなければならないことは、たくさんある。障害者は、まずは自分の障害を受け入れる事から始まる。しかし、自分の障害を受け入れようにも、社会の受け入れ態勢が不十分だと、それを受容することは難しくなる。少なくとも、パラ選手は自分の障害を十分に受け止めた上でスポーツと出会っているから、障害者同士の会話では健常者が聞くとドキッとするような冗談も平気で言い合う。そもそも日本は、障害について扱ってはいけないような雰囲気がある。たとえば、アメリカには、リカちゃん人形にも車いすバージョンがあったりする。しかし、日本にはそういった風潮もない。■だからこそ、もっと障害者について子ども達には教えていきたい。子ども達は純粹だから、私の映像を見て「え、泳げるんだ」みたいに思ってくれる。彼らへの教育の一環としてパラリンピックを教え、障害をもつ選手のためにエレベーターでは譲ってあげようねとか、気づかせる時間が必要だと思う。気づきにより、みんなが助け合っていくことは、ボランティア育成にもつながる。伝えていくことは何よりも重要である。■また、各地に障害者が使えるスポーツセンターを作るのであれば、大学などの既存施設ももっと利用した方が良く考える。たとえば、大学の施設を利用することが結果的に、障害をもたない学生にも良い刺激になると思う。パラリンピックの存在もそうだが、障害を持っている人がこれだけ楽しくスポーツしている姿を身近で見ってもらうことの意義は大きい。1人だけでは伝えることに限界がある。体験だけでなく、続けるためには、健常者のスイマーにもパラリンピックのこともっと関心を持ってもらいたい。

## ーあなたがパラスポーツに関わったきっかけ、経緯を教えてください。

■13歳の発病であり、入退院が多かった。スポーツを始めたのが車の免許を取る前であったので、親に多摩の障害者スポーツセンターまで連れて行ってもらい、17歳位に初めて車いすバスケットを始めた。帰りはチームメートの車いすの人が自宅まで送ってくれた。バスケットは楽しかったが、その後また病気が悪くなって入院した時に、ソウルの陸上をテレビで見格好いいと思った。陸上もおもしろいと思い、車の免許を取ってから新横浜のラポール（身障者のスポーツ施設）に行き陸上の練習を始めた。ある日、陸上の練習後に更衣室で着替えていたら、障害を持っている人から「25m泳げるか？」と聞かれた。当時の私はかなづちであったので「泳げません」と答えたが、水泳の大会があるから出場しないかと聞かれた。一度は断ったものの、仙台で開催される大会に魅力を感じ、練習を始めた。1ヶ月練習を積んで、何とか泳げるようになり仙台の大会に出場したところ、個人種目の2種目で大会新記録と言われ、とても驚いた。しかし、2種目で金を取った大会の帰り道で、追突事故に遭い、左手に麻痺という後遺症が残った。今でも、左手は手を広げることができずグーの状態泳いでいる。その事故後は、余計泳ぎたいという気持ちが強くなった。退院後は、自宅からラポールまでの片道1時間弱の時間が勿体なく感じ、自宅近くのスイミングを利用しようと思うようになった。ところが、スイミングクラブに電話をすると利用を断られてしまった。車いすを利用していることを話すまでは対応は良いが、「車いすです」と言った瞬間に対応が変わり、「車いすに乗っていて何で泳ぐのですか」、「泳ぐ

必要性があるのですか」とか、厳しい言葉を言われ、とても悔しい思いをした。しかし、6ヶ所ほど断られた後の7ヶ所目に、今通っているスイミングクラブのコーチとの出会いがあった。コーチはロサンゼルスオリンピックの水球に選手として出場している経験がある方だった。パラリンピックに出場したいという私の熱意を買ってくれたものの、当時のコーチは初めて障害を持っている人と接したという状況だった。そこでまずは、病気や障害のことを理解するために、本を読み漁ってくれた。そしてコーチとの2人3脚が始まり、アトランタ大会に出場を果たした。しかし、そのスイミングクラブは、入り口や更衣室、トイレにも段差があり、決してバリアフリーではない。19年通っている今でもスロープはないが、スイミングクラブのひとたちが、段差の昇降で困っていると、さりげなく介助してくれたり、自助努力では解決が難しいところをフォローしてくれるなど、区別のない心のバリアフリーが形成され、私はそれを心地よく感じている。

#### ー現在のトレーニング環境に関するご希望をお知らせください。

■選手の中には固定給が無いとか、知的障害をもつお子さんの親御さんも含め合宿代などを出せないという経済的な理由で、競技継続を断念してしまう人もいる。私の場合は、固定給があり、合宿代なども払えているので恵まれてはいる。最近では、社員としての雇用契約で、合宿代などまで面倒をみてくれる企業も増えつつある。私の場合、資金的な援助はなかったが、パラリンピックに出場するために長期の休暇を許可してくれたので助かった。選手は、休暇の扱いについての弾力性があれば合宿や大会などに出場しやすい環境になりつつあるが、コーチはまだそうした環境には至っていないのではないかと思う。

#### ー競技を継続するための条件整備をお知らせください。

■貧血がひどかったが、たまたま私の姉が栄養士であったので、食事の面からもアドバイスは貰っていた。また、障害からくる体調不良にならないよう、さらには体温調整もできないために体調管理にはとても気を付けている。しかし、他のパラリンピックを目指す選手に聞くと、ドーピングも含め、体調管理や選手としてのコンディショニングを整えるための知識が十分でないという。医学的な知識が選手個々に十分に伝わっていないのではないだろうか。一方で、選手として、自分の身体を自分で守っていかなくてはならないという意識や、怪我をしないための身体づくりなど、選手としての意識も必要である。さらには、パラリンピックに出場したいと思っている最近の若い選手には、モチベーションや意識を高めることが課題であると認識している。とはいえ、水泳で言えば泳げる環境が十分に構築されているとはいいがたい。多摩のスポーツセンターやラポールに行けばスポーツ環境が整っていたとしても、そこに行くまでのアクセスが悪ければ意味が無い。日本も変わってきてはいるが、オーストラリア（シドニー）などの環境にまでは追いついていない。そこでは、バスに乗ろうとすれば運転手さんの手でボタンを押せば、バス自体が傾いて自動的にスロープが出るなど公共の交通機関も整備されているため、1人でも違和感なく街に出かけることができる。どのパラリンピックに行っても、選手村で移動の困難さをあまり感じたことがない。2020年の東京オリ・パラでも、日本がこうした取り組みをできないわけがない。世界からの障害者をちゃんともてなせるのか、障害者をみたら舌打ちでもされるようだったら恥ずかしいからこそ、公共交通機関の人たちも含む、ひとりひと

りの教育が重要であると考え。そして、医療関係者にも、パラリンピックをもっと知ってもらいたいと考える。理学療法士や作業療法士の方が、たとえスポーツに関わらなかったとしても、パラリンピックというスポーツがありますよといった情報を患者さんたちに提供するだけでもいいのではないか。意外と、こうした医療現場の理学療法士や作業療法士の方がパラリンピックに関する知識をもっていないこともある。



(編集責任：田中暢子)

### Ⅲ 障害者スポーツ選手 4 国枝慎吾

#### ■ヒアリング概要

日時	2014(平成26)年10月8日	場所	株式会社サーベイリサーチセンター神田事務所
所属	株式会社ユニクロ		
回答者	国枝慎吾		
聞き手①	高橋義雄 (筑波大学体育系)		
聞き手②	岡本純也 (一橋大学大学院 商学研究科)		
聞き手③	山本純生 (公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)		
編集	高橋義雄 (筑波大学体育系)		

#### ■共通質問事項要約

①障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か	●テニスクラブが全国にもう少しあると良いと思う。今はトップを目指す選手がTTCに集まってしまうので、地域のレベルがダウンするという問題もある。関東、関西、九州、東北にそれぞれ1つずつあると良い。ただ、最終的にはコーチなど人が重要なので、教える人材が育たないと人は集まってこないと思う。
②障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か	●レッスンを1対1で受けるとそれだけお金がかかるので、導入の段階では4～5人で受けるような形がいいのではないかと。そのような形のローカルの拠点が各地にあるような体制になってほしい。
③2020オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか	

#### ■選手質問事項要約

④あなたがパラスポーツに関わったきっかけ、経緯を教えてください	●車いすになる前は野球をやっていた。障害者になってからも何かスポーツをと母が考えて、最初は3on3 (バスケット) をやっていた。しかし家の近くにチームがなかったため、母のテニス仲間の紹介でスクールに連れて行かれた。最初は抵抗があったが、日本のトップクラスの選手のラリーをみて、そのレベルの高さに「やってみよう」と思ったのがきっかけ。
⑤現在のトレーニング環境に関するご希望をお知らせください	●TTCは全てそこで完了できるシステムになっているので、不満はない。ただ、スポーツでは人の問題がすごく大きく、丸山コーチがお辞めになってからは結構苦労している。 ●良い指導者が1人いなくなっても他の人で補えるような体制をつくらないと、一気に廃れてしまう可能性もあると思う。なので若い指導者の育成はとても必要。
⑥競技を継続するための条件整備をお知らせください	●レッスン費や遠征費などで年間最低でも300万円はかかる。自分は親への負担も考えてアテネを最後に辞めようかと思っていたが、金メダルをとれたことでテニス選手として企業に雇ってもらえる可能性が生まれ、命が繋がった。 ●マネジメント会社 (IMG) に所属。直接お金の話をするのはやはり難しいので、絶対マネジメントは入れた方が良いと思う。肖像権に関わる話などおとりあえずIMGに通すようにしている。
⑦その他	

ー車いすテニスに関わられた経緯から教えてください。

■9歳の時に脊髄腫瘍で車いす生活になったんですけど、それまでは野球をやっていました。障害者になっても普通学校に通っており、友達と放課後3on3だとかで遊んでいたというのが車いすになった後もずっと続けていて、どちらかというとも車いすバスケットの方へ行くのかなというイメージがありました。しかし家のそばに車いすバスケットのチームがなく、車いすになって2年が経過した11歳の頃、母がテニス仲間から家の近くで吉田記念テニス研修センター（TTC）というところで車いすテニススクールがあるよということを知りつけて、まあ半強制的にそこに連れて行かれたというのが経緯です。最初は車いすの方々と触れ合うのが初めてということもあり、自分自身も車いすなのですが、障害を負ったことを、まだそこまで受け入れきれていない時期でもありました。そういう方たちとどう接すればいいのかなと、ちょっと不安もあって最初は正直抵抗がありました。車いすテニスのイメージはラリーがゆっくり繋がってそんなにたいしたことないのかなと思っていたのですが、実際見てみたらスピード感あるラリーで、「あー、こんなに激しいスポーツなのだ」と。それが完全に覆りまして。本当に普通のテニススクールの方々よりも上手いレベルで。「これだったらちょっと僕もやってみたいな」と思ったのが本格的にこのスポーツに取り組んでみようというきっかけとなりました。

ー日本のトップ、世界のトップを目指すようになったきっかけを教えてください。

■小学校6年生から中学3年ぐらいまでは週1~2程度の練習でしたが、それでも日に日に上手くなっていくような実感はありました。しかし試合と練習は全く別物で、試合に出たらそこで1回戦負けをくらって闘争心にはちょっと火がつかしました。しかしあんなにドキドキするような経験は、野球をやってた頃の試合と本当に同じような感じだったし、自分の中では本当にスポーツの舞台に帰ってきたなというふうに感じた瞬間でした。本格的にトップを目指すことになる転機としては、高校1年の時にまだ日本で60~70番手くらいのレベルだったのですが、初めて海外のジュニア合宿に派遣されるというチャンスに恵まれました。そこで世界ナンバーワン選手のデモンストレーションを見る機会があり、これまで日本で経験してきたものとは全く違う次元の車いすテニスの世界を垣間見ました。その当時日本で1番の選手は働きながらやっているような状態で、一方世界の1番の選手、いえ1~10番手ぐらいまでの選手はテニスだけで生計を立てているような人で、やっぱりコートに入ると雰囲気は全く違っていました。「これで食って行く」というプライドのようなものが感じられ、「いつか私もこの同じ舞台でやりたい」と、僕が初めて車いすテニスをやってきて目標を具体的にイメージできた瞬間でした。今思い起こすと、その時の経験というのはすごく大きかったかなと思います。

ー練習環境として吉田記念テニス研修センター（TTC）を中心に活動されている理由をお聞かせください。

■TTCの施設は14面コート（ハードコート）があって、そのうちインドアは4面あります。やはり雨の中でも休まずトレーニングができるというのは最大の利点かなと思います。ほとんどの国際大会はハードコートなので、どの大会にでもでも適応できるという利点もあります。付帯環境として、ジムもありフィットネストレーナーもついていて、尚且つマッサ



ージのケアの方もいるということで、全てがそこで完結できるようなシステムになっています。そのようなハード的な環境とソフト面として TTC が持っている強化プログラムが私には非常にマッチしたように思います。いま自分が世界 1 位にいられるのも TTC のそういったプログラムの成果だというふうに感じています。TTC に行けば全てが、テニスに必要な能力全てを兼ね備えることができました。あとは優秀なコーチがいるかどうか、優秀なトレーナーがいるかどうかというのはその選手の結果に非常に影響を及ぼすと考えています。高 1 ぐらいから練習も週 3~4 日にちょっとずつ増やして、競技力も上がってきた高 3 のときに丸山コーチとの出会いが世界を目指すきっかけの一つになったと思います。

ー海外を視野に入れた頃からの車いすテニスに関わる活動経費について教えてください。

■TTC でのレッスン費。あとは海外遠征が相当多いスポーツなので、高校 3 年ぐらいから海外デビューを本格的に始めて、ツアーを回り始めましたが、その頃は年間最低でも 300 万円掛かりました。いまは年間大体 700 万円ぐらいです。コーチの日当とかホテル代とか全て合わせた額が 700 万円ぐらいかなという感じがしますね。現在は幸いにもスポンサーもつきなんとか工面ができていますが、それまでは親の援助のみで活動をしていました。20 歳の時にアテネパラリンピックに出場しましたが、平凡なサラリーマンの家庭ですのでこれ以上親に負担させるのはまずいなというふうな思いもありました。結果的にアテネのダブルスで金メダルを獲ることができ、プロテニス選手としてやっていけるという自信と地盤を築けたような気がします。いまは日本車いすテニス協会から強化費もいただけるようになり環境も良い方向に向かっているようにみえますが、やはり年齢を重ねるにつれ身体のケアの必要性が高まり、コンディショニング等の間接経費に関しては、毎年のように増えていきます。そうするとトータルコストもそれだけ増えていっているというのが実情です。これ以上のコストに関しては、その配分をどうするか、コーチをどの大会へ帯同させるかとか、もちろん全ての大会にコーチ、トレーナーを帯同できればベストなのですが。この問題は別に車いすテニスだけじゃなくて全てのマイナーなスポーツは同じような状況だと思うのですが、国策としての支援も充実し、もう少し楽になるといいなというふうには思う部分もあります。

ー海外で活躍されるにあたってのマネジメントについて教えてください。

■私は大学卒業後大学職員として 2 年半程働いていましたが、このアマチュアな状況は競技を続けるにあたってはおもしろくないなど。もちろん安定した収入は入ってくるし、出張費として遠征費も出してもらっていたので、そこは全く問題ありませんでした。しかしやはりこれから車いすテニスを始めよう、世界一を目指そうという子に対して全く夢がないなというふうに思っていたので、世界で 1 位であるならばしっかり稼いでリッチな生活も送る。そういうことをやっている姿を見せるというのも非常に大切なんじゃないかなと思い 2009 年にプロに転向しました。その時に、エージェントに接触し、自分自身でプレゼンテーションの資料を作って売り込み、マネジメント会社と契約をしました。いわゆるスポンサーを見つけてきてもらい、マッチメイクしてもらうタイプです。個人マネージャーをつけるというやり方ではなく、スポンサーからお金をいただいて、それを全部自分でやり繰りをするような形なので、「この大会は重要だからコーチ、トレーナーを連れて行こう」

「この大会はそれほどでもないから1人で行こう」、そういった決断は全部自分でしています。スポンサーからのお金をテニス活動のどこにどれだけ費やすかというバランス感覚というのは常に必要になってくるかなと思いますね。それを考えなくてもいいほど、お金がもらえれば越したことはないですけど。その辺はやっぱり大事になってくると思いますね。

—車いすテニスの普及に関して何か感じられていることはありますか。

■一番望ましいのは、TTCのような車いすテニスのレッスンプログラムを持つ他のテニスクラブがもう少し増えてもいいのかなと思いますね。現状では、ほとんどの全国的な選手が、「トップ目指すぞ」となるとTTCに集まってきてしまう。理想は、関東、関西、九州、東北に1つずつぐらいTTCと同等レベルのクラブがあるといいと思います。1人のコーチが教えるという仕組みは、各地で少しずつできてはいますが、コーチ1人ではなく、トレーナーだとかそういった体制全てを網羅し、選手育成プログラムまで整備されているところはやはりまだTTCにしかない。そういう点では各地のローカルな自治体に1つずつとかいうことではなくて、近隣何県かがアクセスしやすいような拠点があると望ましいと思います。広域テニススクール拠点ができるとしたら、当面はコーチ中心にTTCから派遣するというオプションも有効かなと思います。海外に目を向けると、国のサポートが充実しています。特にいまイギリス、オランダはナショナルコーチ、トレーナーとして国が派遣をするスタイルですね。基本的には選手からの負担がなく、特にイギリスではそれがすごくいいサイクルで回っていて選手もどんどん出てきています。ロンドンパラリンピックの遺産というか、ロンドン大会が成功して、その後も強化費がしっかり下りているといった状況があると聞くので、日本もそういったスタイルになればいいなと思います。

—車いす自体はエクイップメントルールとか、改良ができる可能性はありますか。

■レギュレーションとかはいまのところ結構フリーで。どんな素材を使っても費用的にも制限はありません。最高のマシンを作り込むことは可能です。ただ何が最高のマシンなのかというのは本当に誰もわかっていないと思いますね。選手個々のプレースタイルの問題だとか、その人の身体にどれだけ合っているのかという問題もありますし。たとえば一昔前は低い体勢でのスライスショットがバックハンド主流でした。私が2006年にバックハンドをスピンド打っていくプレースタイルに変更すると今度はボールを高めで処理することが増えてきました。そうなるといままでの低いボールに対応する車いすの高さだと、全て頭より上で取らなきゃいけなくなってしまうという状態になって、今度は車いすをちょっと上げていく。でも上げていくと重心が高くなって小回りが利かなくなってきました、車いすの操作が遅くなってしまいます。それをどうカバーするかという技術的な問題がすごく難しいんです。今年は2センチだけ最初上げてみましたが、少し高すぎるなと感じて、また低くして行って今までより7ミリだけプラスしました。結局どの高さがベストなのか。たった7ミリですけど、それでもかなり力が入るところが変わってきます。あとはカーボン技術というのがいま非常に進んでいて、1,000万円掛かるみたいなのですが、スポンサーからカーボン製の車いすを作ってあげるといった話もありました。1,000万円の車いすを使ったらやっぱり不公平があるかなと。「国枝はカーボンに乗っているから勝てる。」みたいに思われてもおもしろくないので、いまの段階ではカーボンはまだ早いかなと思っています。

ー2020年東京パラリンピックを目指し、その後のセカンドキャリアは何か描かれていますか。

■基本的には2020年でもう引退しようかなと今のところ思っていますけども、引退後も何らかの形でテニスには関わっていきたいとは思っています。自分自身で培ってきたノウハウが沢山ありますし、やはり指導者には興味があります。先ほどお話しました、世界を転戦する際のマネジメントをどうするかであるとか、注意点であるとか、というようなこともものすごく貴重な財産・資産で、次世代の選手のプロ化支援にも携われるのではと思っています。TTCから人を派遣していくのであるとか、TTCのシステムを別のところでもやっていくというようなことというのは、おそらくビジネスモデルとして上手くできあがれば可能になるのではないかと言いましたが、それはやっぱり日本だけじゃない規模で考えたいと思っています。世界的にもオファーがあれば、たとえば選手・コーチを派遣して発展途上国で指導するとか。そういったプログラムも少し興味があるところです。日本だけでなくグローバルにそういったビジョンは考えていきたいなとは思っています。

ー次世代の車いすテニスの展望をおきかせください。

■指導体制の基盤強化は最重要課題のひとつだと考えています。これまでは丸山コーチのようないい指導者がいて引っ張って来てくれましたが、1人の優秀な指導者に頼るのではなく、他の人でも補完できる体制を作らないともう一気に廃れてしまう危険性はあります。オランダがずっと車いすテニス界を引っ張って来て15年ぐらい頂上にいたのですが、やはり有能な指導者が離れていくと、選手たちのレベルが落ち弱体化し始めてきています。この例をみても若い指導者の育成というのも非常に重要なことと感じます。選手ももちろん世代交代していく必要があると思います。選手発掘という意味では身体の柔らかい選手が良いですね。健常者のテニス以上に厳しい体勢で打たれることが多くて、それをいかに返すかというスポーツでもあるので、やっぱり可動域が広くて尚且つ関節も柔らかくてという選手が結局は頂点に早く上がってくるかなと思います。内面的には性格とかの面もやっぱりありますよね。どれだけ基本的な練習を集中してできるかだとか、そういったメンタル的な忍耐力も重要な要素です。あとはもうやっぱり海外適応というか。4ヶ月ぐらいは海外遠征なので、そういったところでどれだけ忍耐力があるかというのは必要になってくると思います。



(編集責任：高橋義雄)

### Ⅲ 障害者スポーツ選手 5 狩野亮

#### ■ヒアリング概要

日時	2014(平成26)年10月15日	場所	日本体育大学
所属	株式会社マルハン		
回答者	狩野亮		
聞き手①	海老原修 (横浜国立大学教育人間科学部)		
聞き手②	澁谷茂樹 (公益財団法人笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所)		
聞き手③	山本純生 (公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)		
編集	海老原修 (横浜国立大学教育人間科学部)		

#### ■共通質問事項要約

①障害者スポーツが認知・拡大するために何が必要か	<ul style="list-style-type: none"> <li>●周りに何かを望む以前に、まず自分達のレベルを上げるべきだと思う。それで興味を持ってもらえればどんどん盛り上がっていくのではないかな。</li> <li>●「障害者のスポーツ」という認識がいまだに強いので、「いちアスリートとしてかっこいいんだぞ」ということを発信して、イメージを変えていきたい。</li> <li>●スポーツに出会うという部分では、親と子の関係も大事だと思う。親が世話を焼き過ぎてしまうと、子供がチャレンジしなくなってしまう。</li> </ul>
②障害者競技スポーツを続けるためには何が必要か	<ul style="list-style-type: none"> <li>●用具を揃えるなど家族の負担が大きいので、その点では多くの組織、多くの人を巻き込むというのにも必要なと思う。一ヶ所、用具等も自由に使える拠点ができると良い。</li> </ul>
③2020オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか	<ul style="list-style-type: none"> <li>●この5、6年で何かを残さなければしばらく変化は起こせないと思っているので、選手はクオリティを上げて興味をどれだけ惹きつけられるか、組織は後に繋がる形をしっかりと築き上げられるか、という部分で勝負の時期だと思う。</li> </ul>

#### ■選手質問事項要約

④あなたがパラスポーツに関わったきっかけ、経緯を教えてください	<ul style="list-style-type: none"> <li>●北海道出身なので、小さい頃からスキーは身近にあった。怪我をしてスキーからは一度離れたが、アーチェリーの先生からチェアスキーの存在を教えられて始めた。最初はレジャー感覚だったが、2年後くらいに長野パラリンピックをテレビで見て、競技としてやりたいと思った。しかしその後も選手としてはなあなあ意識であったが、トリノで森井選手がメダルを獲り、周りが喜んでいる姿などを見て、真剣に向き合うようになった。</li> </ul>
⑤現在のトレーニング環境に関するご希望をお知らせください	<ul style="list-style-type: none"> <li>●長野オリンピックの頃に一時行っていたようだが、風洞実験はできればすぐにもやりたいと思う。ダウンヒルであれば、風の抵抗を減らせば1～2秒は平気で早くなると思う。</li> </ul>
⑥競技を継続するための条件整備をお知らせください	<ul style="list-style-type: none"> <li>●今のような練習環境を作るにはやはりお金がかかる。自分は企業に所属することでそれをクリアできたが、活動を続けたいと思っている選手にとってはどのようなアプローチを掛けていいかわからない状態なので、そのきっかけとなるものがたくさん作られると良いと思う。</li> <li>●他の選手を見ているとしっかりしたトレーナーについている人は少ないように感じるので、トレーニングについてなど選手間で情報を共有できるような仕組みができると良い。</li> </ul>
⑦その他	

狩野亮（かのう あきら）、28 歳、北海道網走市出身。父親はスキーの指導員で幼少時よりスキーに親しむ。小学校 3 年生のときに、登校中の自動車事故で脊髄を損傷し半身不随に。自宅より 15 分で車いすアーチェリー、1 時間でバスケットボールを練習する中、中学校 1 年生の時より障害者スキーを始めるが、折しも開催された長野オリ・パラでの障害者スキーの雄姿に感激し専門マシーンとなる長野モデルを購入して本格化。2006 年トリノ大会でパラリンピック初出場を果たす。2010 年バンクーバー大会では「男子座位スーパードリフト」で金メダル、「男子座位滑降」で銅メダルを獲得。2014 年ソチ大会では、「男子座位スーパードリフト」「男子座位滑降」の 2 種目で金メダルを獲得。平成 26 年度春の「紫綬褒章」受賞。

### <課題 1>障害者スポーツの高度化を支える家庭環境

教員でスキーの指導員資格をもつ父親がつくるスキーに親しむ幼少環境を手始めに、小学 3 年受傷後も 15 分で車いすアーチェリー、1 時間でバスケットボールに接するスポーツ環境を維持する中、1988 年長野オリ・パラのチェアスキーへの関心は専用マシーン・長野モデル購入で一気に加速する。恵まれたスポーツ環境・家庭環境を基盤とする。かかる条件の妥当性を検証するとともに、有効な条件の選定と優先順位を設定したうえで、公的なスポーツ環境の整備条件に組み入れる試行は障害者スポーツの基盤となる。また、高校 3 年時、ナショナルチーム・ジュニア育成部門に招集・オーストリア遠征。海外のチェアスキー環境はそれなりに衝撃的だが、日本のトップアスリート、森井大輝や鈴木猛史と接する自身のスポーツ環境と遜色はないと認識する。往年のトップアスリート・四戸龍英からの誘い「安比高原で一緒に練習しよう」を契機に、進学先を福祉工学系の岩手大学とする。

### <課題 2>大学卒業後に競技生活を継続する社会経済的環境について

－ハード面では安比高原、ソフト面では四戸龍英選手からの庇護からなる岩手大学時代と同じ質の高い環境を確保するために、卒業後の進路に向けたどのような動きとかあったんですか。

■自分の履歴書と障害者競技スポーツの思い入れや成績といったプロフィールを日本中の企業 130 社をピックアップして、すごい失礼な話なんですけどゲリラ的に送り、40～50 社からの反応を得て、連絡するも「残念です」「今回はご縁がありませんでした」という話がほとんどだったなか、「しっかりと話を聞きましょう」という会社が 4 社あり、交渉を通じて現在のマルハンに就業している。

#### －雇用形態は

■契約社員。業務内容はスキー活動そのもの、講演活動といったイベント出演。言い換えれば、年間を通してスキーのトレーニングとイベント。オフには講演・イベントを多めに入れて、オンシーズンにはトレーニングに専心したいと考える。夏場のオフでも、パーソナルトレーナーの指導を含めた 3 部練習を堅持し、チェアの改良を大阪・川村義肢と検討する。栄養関係の専属スタッフはいないが、相談に出向き、自身で調合する。

### ＜課題3＞障害者競技スポーツの強化体制について

ーナレッジシェア（\*1）の中核は誰が担っているのか。

■体力、技術、栄養、メンタルなどの訓練法や年間スケジュールの調整は個人個人の秘密めいた時期もあったが、森井大輝が中心にオープンな情報交換に切り替える。

ー恵まれた現在の環境を維持するための経済的支援について

■マルハンの契約社員にて他企業から金銭的支援を受け取れないという点で完全なプロではない。海外ではプロ契約を請け負う企業体（IMG\*2）が選手の金銭面を管理運用している事例があるが、並行して連盟や協会等からの関与（手数料・上納金・ギャランティ等）もあり得る。このシステム構築に向けた過渡的な措置がチームスポンサーかもしれない。

### ＜課題4＞障害者スポーツの社会的認知について

ー障害者スポーツの認知が高まったり理解が進んだりするために何が重要だと思いますか。

■拠点づくり。家庭に掛かる負担も大きく、用具とか全てにおいて大変なので、多くの組織と多くの人を巻き込むというのが必要かな。お金をいっぱい集めて、それこそ「ここの拠点を作っておくので、ナショナルチームが日本に帰ってきた時はここで活動しているからジュニアの子たちも集まりましょう」というイベントがもしチームで開ければ、強化と普及・発掘に拠点モデルがあれば、それぞれのエリアに応じた変形・転形した拠点ができるといいよね、理想ですよね。現在合宿を組んでいる長野県菅平高原かしらん、山形県蔵王・坊平もあるかなあー。

ー社会的に障害者スポーツをイメージアップする手法としてメディアの役割が重要と思うが、行政の理解を含めて、お感じになるところはありますか。

■車いすをみる一般人の目は「苦勞して頑張ってるすごいわね」がいまだに強い。それは福祉のグッズであって、スポーツではない、そのようなイメージを打開できていない。障害者スポーツの選手たちが、本当にアスリートとしてカッコいいんだぞ、とどんどん発信して、イメージを変えていきたいというのは感じていますね。海外とかに行くと普通に知り合いの選手がお酒のCMに出ていたりとかコンビニのCMに出ていたりとか、当たり前のような存在になっているので。

ー障害者スポーツが認知・拡大するために何が重要か。

■周りに何かを望む以前に、まず自分達のレベルを上げるべきだと思う。それで興味を持ってもらえればどんどん盛り上がっていくのではないかな。■「障害者のスポーツ」という認識がいまだに強いので、「アスリートとしてカッコいいんだぞ」ということを発信して、イメージを変えていきたい。■スポーツに出会うという部分では、親と子の関係も大事だと思う。親が世話を焼き過ぎてしまうと、子どもがチャレンジしなくなってしまう。

ー障害者競技スポーツを続けるためには何が重要か。

■用具を揃えるなど家族の負担が大きいため、その点では多くの組織、多くの人を巻き込むというのも必要かなと思う。一ヶ所、用具等も自由に使える拠点ができると良い。

ー2020 オリ・パラへ向けて環境面で誰に何を期待するか。

■この5、6年で何かを残さなければしばらく変化は起こせないと思っているので、選手はクオリティを上げて興味をどれだけ惹きつけられるか、組織は後に繋がる形をしっかりと築き上げられるか、という部分で勝負の時期だと思う。

ーあなたがパラスポーツに関わったきっかけ、経緯を教えてください。

■北海道出身なので、小さい頃からスキーは身近にあった。怪我をしてスキーからは一度離れたが、アーチェリーの先生からチェアスキーの存在を教えられて始めた。最初はレジャー感覚だったが、2年後くらいに長野パラリンピックをテレビで見て、競技としてやりたいと思った。しかしその後も選手としてはなあなあ意識であったが、トリノで森井選手がメダルを獲り、周りが喜んでいる姿などを見て、真剣に向き合うようになった。

ー現在のトレーニング環境に関するご希望をお知らせください。

■長野オリンピックの頃に一時行っていたようだが、風洞実験はできればすぐにでもやりたいと思う。ダウンヒルであれば、風の抵抗を減らせば1～2秒は平気で早くなると思う。

ー競技を継続するための条件整備をお知らせください。

■今のような練習環境を作るにはやはりお金がかかる。自分は企業に所属することでそれをクリアできたが、活動を続けたいと思っている選手にとってはどのようなアプローチを掛けていかわからない状態なので、そのきっかけとなるものがたくさん作られると良いと思う。■他の選手を見ているとしっかりしたトレーナーについている人は少ないように感じるので、トレーニングについてなど選手間で情報を共有できるような仕組みができるとう良い。



\*1 ナレッジシェア：目的達成に向けた個々人のもつ知識を集合体の知識に建設的に構築し、個々人が不足する情報を適宜取得する。

\*2 IMG (International Management Group)：スポーツ、エンターテインメント、メディアなどの総合メディア運営を行うアメリカの企業。

(編集責任：海老原修)